

# 観光文化

Tourism & Culture



財団法人日本交通公社

## 特集◎ みなとまちの賑わい再生 — 港とまちの一体化を!!

### ◆巻頭言

文化と賑わいを呼んだ港町、  
そのパースペクティブな歴史に学ぶ視点 岡本 哲志……①

### ◆特集

- みなととまちの賑わい再生  
— 景観形成からの取り組み 東 恵子……②
- 「みなとまちづくり」を推進する  
— その現況と展望 橋間 元徳……⑥
- 産・民・官・学が一体となって創出する  
みなとの賑わい 谷本 典量央……⑨
- みなとまちを交流の舞台に  
— みなとまちの人情と魅力を語る 明戸 真弓美……⑭

### ◆特別寄稿

- 「観光」に「サイエンス」を  
— 観光統計を活用した実証分析に関する論文募集について  
国土交通省観光庁参事官室（観光経済担当）……⑱

### ◆視点

- 日本人旅行者誘致に向けた海外各国のイメージ戦略  
— 競合国との差別化・新イメージの浸透と、日本への応用 朝倉 はるみ……⑳

### ◆連載

I あの町この町 第38回

南の恵み —和歌山県田辺市 池内 紀……㉔

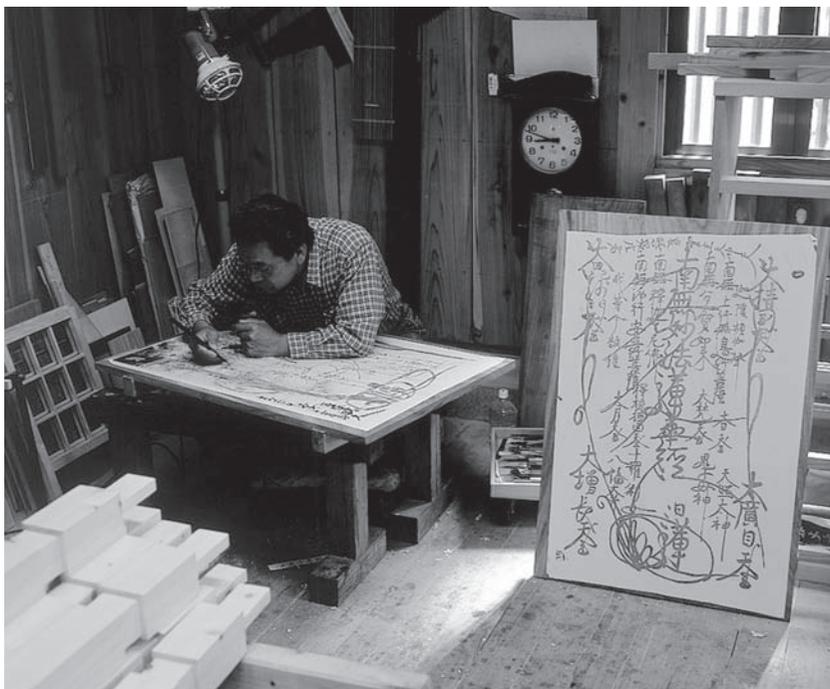
II 風土燦々⑪

前代未聞の三河版サミット（後編）— 愛知県新城市 飯田 辰彦……㉔

III ホスピタリティーの手触り 59

アメリカ人の魂が宿る場所 山口 由美……㉔

◆新着図書紹介……㉔



## 赤沢宿・仏具師

前回は赤沢宿の由来をお伝えしたので、今回は仏具師の木工房を構える依田修さん(五十二歳)を紹介したい。息子の淳司さん(二十九歳)の名前を取り「工房淳司」とある。

親子二人が黙々と其々の仏具制作に精魂をこめている姿は仏具師というより芸術家を思わせる風格がある。彼は中学校卒業と同時に職業訓練校へ入り建具職人として身を立てようとしていた二四歳の時、「叔父である僧侶に勧められ仏具の世界に進んだ。」と語る。

以来、三〇年間「板まんだら」「彫りや」「お宮さん」と言われる神社などで使用する仏具を手掛けて今日に至っている。一番苦労するのは「獨創性を生かし、高めること」だと自信に満ちた表情で話す。需要がどこにあるのかと水を向けると「大阪、能登半島、富山、名古屋と関東周辺」の神社が主で約三〇〇の仏具を収めて来たという。彼の仏具が如何に精巧ですばらしいかが、うかがえる。過疎化を迎えた宿場に光が差しているかのようで頼もしい。(写真・文 樋口健二)

「津々浦々」。日本中どこにでもあった港町は、現在では大半が漁村となり、港には漁船だけが係留される。旅で、あるいは日常的に移動する時々、港町へのアプローチは鉄道や自動車であり、船ではない。船を乗り物として気軽に選択できない現状が当たり前になって久しい。

だが、多くの人たちが港町に心引かれる。中世・近世に栄えた港町を旅すると、港が、単に物流基地だけではなく、港と町が一体化した、人々の交流の場であったと実感するからだ。人や物の流れは、本来港町が起点となり、物流の効率性以上に都市文化を開花させてきた長い歴史がある。

古代に奈良や京に都ができ、戦国時代以降に城下町が各地に建設された。政治・経済が大都市に集約化されても、港町の賑わいは、衰えるばかりかさなる展開を見せ、賑わいの場であった。近代以降、陸の文明の象徴として鉄道網が日本全国に張り巡らされる。その時も、水と陸との接点である、港町との関係が常に視野にあった。港町の重要性は変わることもなく、港町は文化と賑わいを生成する基軸であり続ける。

高度経済成長期以降、わずか半世紀。社会・経済状況が大きく変化する。物流の根本が自動車主体に転換する。船は中・近距離の物流の分野からはじき出され、燃料効率から見るとはるかに劣る自動車が船を圧倒する。船は天候に左右されやすく、スピードや正確さも劣る。自動車はドア・トゥー・

## 文化と賑わいを呼んだ港町、 そのパースペクティブな歴史に学ぶ視点

岡本 哲志

都市形成史家

ドアで人も物も運んでくれる。だが、飛行機とともに究極の乗り物として唯一残り得るかといえば、そうではない。地球規模での環境問題は、便利な乗り物、自動車に疑念を抱かせる。対置するように、スローライフ、スローフードに心引かれ、船の存在が見直されてきている。

利便性の追求は、この半世紀の間に、都市の構造をも大きく変えてきた。その象徴的な出来事は、舟運を支えた運河が高速道路に変貌したことだ。特に経済が集中する大都市では、港と町の関係が分離し、都市から離れた場所に物流基地であるコンテナ埠頭が新設された。そこには、人の営みにより成り立つ町を介在させる余地がない。自動車や飛行機に比べスピードがはるかに劣る船は、大量輸送が可能であるメリットを最大限に生かし巨大化する。船も、町から離れる。

一方、漁村化した、近世以前に栄えた港町はどうか。港町は、城下町に比べ、規定された都市空間の基本骨格を堅持してきたわけではない。変幻自在に空間を変化させ、あるいは付加してきた。それも、過去の歴史を切り捨てるのではなく、新旧の空間を有機的に複合させて仕立て上げた。厚みのある新たな場には、賑わい空間がつけられた。歴史の波にもまれ、港町は幾度も再生してきたのだ。漁村となった港町は今、半世紀というわずかな休息を楽しんで待っているかに思える。再び港町に光が当てられる時代は近い。（おかもと さとし）

# みなとまちの賑わい再生 — 港とまちの一体化を!!

地域活性化の牽引役として「みなとまちづくり」に大きな期待が寄せられています。列島・日本には、千カ所以上の港があり、それぞれ長い歴史と地域固有の文化があります。そうしたみなとまちの往時の賑わい再生のための全国各地における施策や取り組み状況とみなとまちの魅力を紹介します。

## みなとまちの賑わい再生 — 景観形成からの取り組み

東海大学開発工学部  
感性デザイン学科教授

東 恵子

急速に進む少子高齢化時代には地方の活性化施策は重要なテーマとなっている。地方の経済活性化策の一つとして観光振興による交流人口拡大が考えられ、各地でその取り組みが始められている。観光振興における経済活性化はもとより、二〇〇八年七月に閣議決定された国土形成計画においても「地域ごとの文化・伝統や個性ある景観などの美しい国土の再構築」とある。このことは、疲弊する地方、過疎化する地域のアイデンティティを確立し、地域文化を

振興し、改めて地域コミュニティの再構築を図ることの重要性がうたわれている。

地方自立時代を迎えその精神的バックボーンになるのは、その地方の地域文化である。今まで主に機能や効率性が求められてきた都市にも、生活の営み、歴史、伝統、習慣、言語、味覚、祭り、自然環境などが醸し出す、他の地域にない魅力ある暮らしの活動拠点としての性格が求められ、あるいは見直されている。

港の景観の魅力は、港の地理的条件などにより育まれた多様な文化が風景に表れ、その地域に生きる人たちの営みの表情に表れるところにある。

特に近年の産業構造の変化や船舶の大型化によって起きている、施設の物理的・社会的老朽化、重厚長大型の産業集積地における低・未利用地の発生などから、生活・交流などへ港湾の機能転換を図ることが重要になってきている。また国際環境社会へ

の取り組みも始まり、港湾の産業競争力としての活力とともに、潤い、ゆとりのある魅力ある地域を形成するために、都市と一体になった美しく使いやすい港湾空間をつくり出すことが求められている。

ここで、地域が主体となつて合意形成・協力をすることにより、美しいみなとづくりを行った先駆的事例として清水港を挙げることができる。

清水港は、天女伝説の三保の松原、富士山を借景にした日本を代表する素晴らしい風景を持つ静岡県の特定重要港湾である。しかし、一九九〇年当時は他の多くの港と同様に、紅白の煙突、老朽化したタンクや倉庫が立ち並び、汚く殺伐とした港であり、その素晴らしい背景が生かされていない港であった。

このように工業地化し市民が立ち寄れなくなつた港湾空間を、物流・生産機能とともに生活機能を持った空間に回復させようと、暮らしの視点から「レディス・マリン・フォーラム」を立ち上げた。このフォーラムは二十〜六十代の女性二十三人で結成し、「食べる」「憩う」「見る・景観」の分科会を設け、

一年間のワークショップのもと「レディス・マリン・フォーラムレポート」として提言を行った。その提言をもとに、費用がかからず実効性のある計画として、清水市（当時）はその翌年「清水港・みなと色彩計画」を策定した。

自然景観と調和した人工景観を創出しようというこの色彩計画は、一九九二年度から実施している。臨港地区の五百ヘクタールの地域を港湾機能や将来方向に応じて、地区ごとのまとまりを持った色彩方針を立てた。その地区の建築物、工作物などをそれに即した色彩に塗り替えることにより、住む人、働く人、訪れる人々に快適で活気のある、個性あるみなとづくりを行うことを基本目標にしている。

特に、この計画の実施にあたっては、港湾関連事業者の自主的な取り組みによる届け出制をとっている。当初は、塗り替えに費用がかかることや企業に独自のC I（コーポレート・アイデンティティ）があることから対象企業の六割の賛同も得られず、計画の実行性が懸念された。このため、協力を得やすい色彩構成の提示、協議会・アドバイザー会議、企業の相談に同じやすい体制などの仕組み作りを行い、案件

のある企業にはアドバイザーが出向き、C G（コンピューター・グラフィックス）によるシミュレーションなどを用いて、それぞれの企業の個性や独自性を生かしながら周辺環境との調和を図るよう提案してきた。その結果、塩害防止のために五〜七年ごとに行われる港湾施設・工作物の更新時期に合わせて周辺環境に調和した塗り替えが行われ、年間四十〜五十件の塗り替え相談を行っている。特に清水港は、物流ヤード、冷凍倉庫群、LNG基地、製造工場群から海水浴場まである多機能な港でありながら、人の集まる賑わい空間の日の出地区の対岸にはタンク、煙突、ベルトコンベヤーの工業群が見えるが、この色彩計画の実施により、これらの産業景観を洗練された風景に演出している。この計画の特徴の一つとしてシンボルカラーの設定が挙げられる。

シンボルカラーは、「美しいみなとづくり」の港のイメージをリードする役割を持たせ、施設・工作物の一部に必ず使用することを義務づけている。

また、清水港の港湾あるいは景観として象徴的な機能を持つ施設には、港のシンボ

ルカラーであるホワイトとアクアブルーで配色計画をしている。

このシンボルカラーは、計画策定時、市民・企業の清水港の将来に求めるイメージとして挙げられた「刷新した、真新しい」の意味を持つ色として抽出している。

航空法の適用から紅白であるコンテナカラーンも、日本で初めてシンボルカラー配色によりデザインされ、洗練された色に塗り替えられている。クレーンは、現在コンテナバースの荷役に七基が活躍する。「鶴」の意味を持つその姿は、港の活動と富士山の自然景観と調和した、まさに「富国徳」の風景を形成している。

特に、清水港開港百周年を機に、日の出地区再開発事業の完成として、民間による商業施設や親水緑地公園、マリーナなどとともに有形文化財に登録された荷役機械のテルファーが整備され、市民の憩いの場となっている。

民間によって進められたエスパルスドリムプラザの開設は、「見る・買う・食べる・遊ぶ」施設としてショッピングからすし横町、ちびまる子ちゃんランド、Jリーグ・清水エスパルス紹介コーナー、西伊豆紹介

コーナー、老若男女に人気のシネマコンプレックスなどが揃い、当時の「レディス・マリン・フォーラムリポート」の提言をすべて実現することとなった。市民から「清水港は最も好きな所でもあり、嫌いな所」と挙げられて以来二十年、今や、みなと祭りをはじめ、マゲロ祭り、大道芸、フラワーショーなど年間を通してイベントが開催され、伊豆との間を結ぶ駿河湾フェリーの運航などを含め年間八百八十万人の人々が訪れる賑わいある港として成功している。

特に色彩計画の事業とともに一九九〇年には客船誘致委員会が設立されクイーン・エリザベスⅡ、飛鳥Ⅱ、クリスタルセレンティ、クリスタルシンフォニー、帆船「咸臨丸」などが寄港、昨年は「日本丸」、「海王丸」の二隻の帆船寄港に十五万人が集まり、港への魅力と関心がますます高まっている。

現在は、臨港区域内から市街地へ美しさという付加価値を求めてエリアを拡大し、「美しいみなとまちづくり」にステップアップしている。全国展開する電気量販店、遊興施設など大規模商業施設の建設が次々に予定され、CI計画により、彩度の高い色彩使用や大型屋外広告物などが提案される

が、清水港のローカルルールとその実績を提示することにより、協議には約三カ月の時間はかかるものの、彩度が低く明度の高い色彩の使用や大規模看板の縮小が行われている。

二〇〇五年の清水港港湾計画において、日の出周辺地区が景観形成重点地区に定められ、二〇〇八年十一月には、静岡市景観条例が制定され、日の出地区は地権者の同意を得て景観形成重点地区に指定されている。加えて、富士山の世界文化遺産登録申請に向け、環境・景観管理計画を有する三保の松原、日本平が構成資産候補として選ばれようとしている。

当時の産業景観の象徴とも言える紅白の景観は、次世代に継承するため総力で取り組んだ清水港の新しい風景に変貌している。市民・企業に対して定期的に行ってきたアンケート調査によれば、港に対するイメージは、シンボルカラーであるアクアブルーの「新しい、清潔感がある、明るい」との印象が浸透してきている。約八割の回答者から港が美しくなったと評価され、誇れる景観として、日の出の再開発整備、港湾荷役活動のコンテナクレーン群が挙げられている。

また港湾関連企業は、職場環境の向上、緑化、ライトアップ、工場内見学など自らできることへの取り組みを積極的に行的っており、港湾環境に対する社会貢献への意識の変化を見ることができ。

このように、塩害防止のための塗り替え時の協力による色彩イメージ効果を活用した一件ごとの取り組みで、景観への価値観と理解が深まり共通の規範が形成された。このことにより「世界に誇れる美しいみなとまちづくり」のネットワークが構築され、美しい港固有の価値を引き出している。経



協働による美しいみなとづくり 清水港

済効果はもちろんのこと、地域の人々の港への関心に加え、企業や市民に「MY Port 意識」が生まれ、それが何にも代え難いものとなっている。

また、「暮らしを海と世界に結ぶみなとづくり女性ネットワーク」の重点事業の一つとして、次世代を担う「若者（学生）を対象とした『みなと』観光教育の構築」を行った。若者の港湾をフィールドにした知的好奇心の向上を目的とする「学習型観光」

教育プログラムを構築するため、全国十港（苫小牧・仙台塩釜・横浜・新潟・清水・神戸・広島・高松・北九州・那覇）で若者（学生）千六十九人を対象に「みなと」の地域資源としての役割やオリジナリティーの認識などを把握することを目的にアンケート調査を行った。地元港のセールスポイント、港利用目的、頻度などともに地元の港の機能・印象評価について十港で比較すると、地元の港への認識は高いことが見受けられる。しかし他地域の港についてはほとんど知らないという結果を得ている。また港への期待としては、「緑地や親水空間のある港」「自然の風景に調和した港」「外国貿易港」「レクリエーション施設が充実した港」「国際交流のある港」などが上位を占める。そのための活動として「景観への配慮」「イベントの開催」「街路樹などの緑化」「憩いの場の創出」が挙げられ、「こんな港になったら

いな」への回答としては「美しい、きれいな港」「楽しくて明るい港」「身近な港」「景観、イルミネーションがきれいな港」などが挙げられ、港の景観に期待する回答が極めて高いことが分かった。

霧笛のなか帆船や客船が入出港する風景に異国を夢見ること、朝日や夕日で染められたドラマチックな風景に感傷的になると、コンテナクレーンやベルトコンベヤーの活気あふれる産業景観に躍動感を覚えること、暗闇の中にライトアップされたファンタジックな光の海にロマンチックな雰囲気になることなど、港でしか味わえないさまざまな風景があり時間があり空間がある。それは私たちの感性に響き、癒やしや感動になる。

海の国・日本には、津々浦々約千百カ所の港がある。それぞれに地域固有の特色ある生活があり、長い歴史があり優れた文化がある。改めてそれらを生かし、地域の人々の知恵と工夫により、港を核として、都市と一体になった景観形成を行うことが地域活性化の鍵であると考え。

（ひがし けいこ）

# 「みなとまちづくり」を推進する ——その現況と展望

社団法人ウォーターフロント開発協会

専務理事

橋間 元徳

## 港湾再開発から

### ウォーターフロント開発へ

港の再生が各地で叫ばれたのは、一九七五年ころであった。特に、アメリカ・ボルティモア港の再開発プロジェクトの成功やサンフランシスコ港ピア39の盛況が、日本の港のあり方に大きな議論を巻き起こした。そして、各港で「港湾再開発」という名のプロジェクトが進められた。

この動きを大きく進めたのが、一九八六年に始まった「ポートルネッサンス21調査」であった。これは、港湾管理者が再開発プロジェクトのための調査をする場合、運輸省(当時)が所要の調査費の三分の一を補助するというものである。それまで、港湾管理者の調査に補助することはなかったため、調査はなかなか進まなかったが、この

制度のおかげで、各港で調査がなされた。八六年度から九五年度までの十年間で、全国五十四港六十七カ所で行われた。この種の調査は、一般に華々しく構想は立てるが、その実現はなかなか難しい。しかし、「ポートルネッサンス21調査」の実現度は約五〇%といわれており、この種の調査としては、かなり高い実現度である。これから分かるように、港湾再開発の推進に「ポートルネッサンス21調査」の果たした役割は極めて大きいものがある。

また、一九八五年四月、運輸省港湾局は「21世紀への港湾」という長期構想を策定した。この長期構想で提唱された「総合的な港湾空間の創造」という概念は、わが国の港湾政策に大きな新しい方向を示した。これは、それまで物流機能中心に整備されてきた港湾に、もっと多くの機能を導入し

ようという画期的な政策提言であり、この政策提言により、港湾再開発は大きく前進した。

一方、一九八〇年代後半ころから港湾再開発という言葉に代わって、「ウォーターフロント開発」という言葉が使われ始めた。「21世紀への港湾」策定の五年後に策定された長期構想は、まさに「豊かなウォーターフロントをめざして」という副題が付けられ、ウォーターフロントの開発は、さらに加速された。

また、このウォーターフロント開発を事業として大きく促進したのは、八六年五月に制定された「民活法」である。この時期、「前川レポート」が発表され、「民都法」、「NIT法」などが制定され、民間の活力を活用した「ウォーターフロント開発」もかなり推進された。ただ、どのような開発がな

されるべきか、それぞれの地域で試行錯誤しながら進められてきた。

## 「みなとまちづくり」の広がり

一九九〇年代、ウォーターフロントの開発は、新たな局面を迎えた。すなわち、ボランティアや民間団体が、港湾所在市町村や港湾管理者、国の支援を受けて、港の賑わい創出や交流を推進することが各地で進められてきた。特に、「NPO法」が制定された一九九八年ごろからこの動きは一段と加速された。そして、このような動きが、「みなとまちづくり」として全国的な広がりを見せてきた。

二〇〇三年、国土交通省中国地方整備局と四国地方整備局が、「みなとオアシス」という制度を作った。これは、旅客ターミナル、緑地および海浜など、「みなと」の施設やスペースを活用して、賑わいや交流の場として地域活性化を目指す住民参加型の取り組みに対して、その取り組みの拠点となる施設や地区を「みなとオアシス」として地方整備局が認定し、支援するものである。この制度は、その後全国に広まっていき、二〇〇九年度までに、北海道から沖縄まで

全国四十八カ所が認定された。この「みなとオアシス」は、それぞれ、地域ごとに協議会が作られ、交流を進めてきたが、〇九年秋、「みなとオアシス全国協議会」が設立され、(社)ウォーターフロント開発協会が事務局を運営することになった。

## 「みなとまちづくり」の支援

「みなとまちづくり」は各地で進められているが、それらの活動を支援する制度も作られた。その一つが、二〇〇四年度に創設された、「みなと振興交付金」(二〇一〇年度より社会資本整備総合交付金に移行)制度である。これは、従来、港湾管理者にのみ補助された国費が、港湾所在市町村にも交付されるようになり、これらの「みなとまちづくり」に大きく貢献している。また、二〇〇八年度に創設された「住民参加型まちづくりファンド支援事業」は、NPOなどが行う一定の「みなとまちづくり事業」に対して、(財)民間都市開発推進機構から出資が行われるもので、「みなとまちづくり」に大きく貢献している。このように、各種の新しい制度がスタートした。

(社)ウォーターフロント開発協会において

も、これらの活動を支援すべく、二〇〇六年、「ウォーターフロント振興支援事業」制度を創設した。これは、各地のみなとまちづくり活動に対して助成するもので、これまで〇六年度から〇九年度までの四年間で二十二港二十九件の事業に対して支援を行ってきた。さらに、〇八年に、「みなとまちづくり研究会」を設立し、また、「みなとまちづくりマスタースター」制度を創設した。

「みなとまちづくりマスタースター」は、みなとまちづくりの成功事例において主導的役割を果たした人などを認定するもので、〇八年は九人、〇九年は十一人が認定され、幅広く活躍されている。また、当協会の「ウォーターフロント振興支援事業」の中に「みなとまちづくりマスタースター派遣支援事業」を作り、「みなとまちづくりマスタースター」の活躍の支援をしている

「みなとまちづくり研究会」は、〇八年五月に第一回研究会を行って以来、毎年二〜三回開催している。毎回、各地の「みなとまちづくり」を主導的にやっている方々による討論会や、講演会を行っている。

また。当協会では、「ウォーターフロント研究サロン」を毎月開催して、「みなとまち

づくり」に関する勉強会をしている。それらの状況については、協会のメールマガジンにて、会員、国土交通省などに情報提供をしている。

## 「みなとまちづくり」 推進の課題と展望

「みなとまちづくり」活動のさらなる展開のためには、いくつかの課題がある。共通した課題としては次のようなものがある。

### ①人材の確保

「みなとまちづくり」活動が活発な所には、必ず「人材」がいる。ボランティア、NPO、民間団体など、組織の形態はさまざまであるが、必ず熱心なリーダーとチームがいる。その人たちの熱心な活動があつて初めて「みなとまちづくり」が進み、美しいみなとまちとなり、憩いの場を持ち、みなとまちは活気を取り戻し、市民は誇りを持つ。当協会の「みなとまちづくりマイスター」の認定は、このような人材を発掘し、彼らの活動の支援をしていこうとするものである。このような人材を発掘し支援していくことは大きな課題である。

### ②資金の確保

このような活動を支える資金の確保は、常に大きな課題となっている。NPOや民間団体でうまく活動を続けている所は、その経営基盤をきちんと持っている場合が多い。継続的にきちんとした経営基盤を持つことが、「みなとまちづくり」においては必要不可欠なことである。当協会の「ウォーターフロント振興支援事業」は、このための呼び水としての効果を果たすことを狙いとしている。

### ③港湾所在市町村、港湾管理者、国の支援

ボランティアやNPO、民間団体などの活動は「みなとまちづくり」に大きな役割を果たしているが、その活動には限界がある。これらの活動を支える公的機関、すなわち、港湾所在市町村、港湾管理者、国などの支援がなくては実質的に「みなとまちづくり」は進まない。例えば、NPOなどの活動の場の提供、広報、情報の提供など、ほんの少しの支援が、NPOなどの活動にとつて大きな支援になっている。また、「みなとまちづくり」活動には、何らかの「施設づくり」を伴う場合が多い。このような場合は、これらの公的機関の支援なくしては進まない。

### ④「みなとまちづくり」活動の連携

各地の活動は、それぞれその地域に合った手作りの活動であると言つてよい。したがつて、他地域の視察、情報交換などは「みなとまちづくり」にとつて大きな効果をもたらす。そのため、それぞれの活動主体が、いろいろな場を通じて他地域と連携し、交流している場合が多い。当協会の「みなとオアシス全国協議会」活動もこれらの要望に応えるものにと考えている。

以上、課題は多いが、「みなとまちづくり」活動は、年々広がりど深みを増してきている。「みなとオアシス」制度は、できてから七年を経過したところであり、「みなとオアシス全国協議会」は、昨年設立されたばかりである。また、「『みなとまちづくりマイスター』制度」も「みなとまちづくり研究会」も、まだできてから二年を経過したところである。「みなとまちづくり」活動は、まだ緒に就いたばかりと言つてよい。それぞれ課題を克服しながら「みなとまちづくり」がさらに進むよう、これから大いに活動を展開していくこととしている。

(はしま もとのり)

# 産・民・官・学が一体となって創出する みなとの賑わい

八幡浜港みなとまちづくり協議会 会長

谷本 典量 氏

はじめに

八幡浜港は、日本一細長い半島、佐田岬半島の付け根に位置し、九州と連絡する海上交通の要衝的性格の港で、四国の西の玄関口として発展してきました。気候は温暖で、リアス式海岸の美しい自然に恵まれた宇和海に面しています。

八幡浜市は、山々が海に迫り平地が少ないため、天正年間（一五七三〜九二年）には埋め立てが行われ、百三十回以上にも及ぶ埋め立て事業によって、今日の市街地を形成してきました。一八七七年（明治十年）には外輪船による八幡浜・大阪間の運輸業が始められ、「伊予の大阪」と呼ばれるほどの商工業都市として栄え、港は愛媛県南予地方における最大の商港に発展しました。一九五二年（昭和二十七年）に八幡浜市が港

湾管理者となり、一九六〇年には重要港湾に指定されたことで、四国と九州経済圏を結ぶ輸送基地として港勢は著しく伸展しました。一九六五〜七四年ころの道路交通網の整備に合わせたフェリー用ターミナルなどの整備、

一九七八年から一九八五年にかけては、市制始まって以来の港湾再開発事業（八幡浜港内約十二ヘクタールの埋め立て）を実施し、大型岸壁などの整備で重要港湾としての機能が充実しました。現在、二千トン級のフェリーボートが大分県・臼杵港との間を一日十四便、別府港との間を一日六便で運航しており、二〇〇九年には約三十万台の車両と約四十万人の利用があるなど、四国と九州経済圏を結ぶ輸送基地として港勢が伸展しています。

## 魚の町の衰退

八幡浜市は、人口約三万九千人、面積

約百三十三平方キロの「魚とミカン」の小さな町です。港内にある魚市場は、トロール漁業の基地として、年間約一万吨、約四十七億円の魚が水揚げされ、主に阪神・



年間40万人の利用があるフェリー

東海・東京方面に出荷する全国規模の生鮮魚介供給基地となっています。アジ、タチウオ、イカ、エソ、タイの漁獲量が約五〇％を占めますが、約二百種以上ともいわれる豊富な魚種が特徴です。古くから、じゃこ天、かまぼこなどの練り製品の原材料にも恵まれていることから、水産加工業の発展を支えてきました。しかし、近年、漁獲量は、ピークであった一九八〇年(約四万八千トン)の二〇％にまで減少し、取扱金額も八五年(約百四十七億円)の三〇％程度と、水産業を取り巻く環境は年々厳しさを増しています。特にトロール漁業においては、資源の減少や魚価の低迷などにより操業隻数は減少し、現在では一統二隻を残すだけとなっています。

### 八幡浜港(港湾・漁港) 振興ビジョン

近年、基幹産業である第一次産業の低迷、若年層の流出による人口減少と高齢化の進行に伴い、市の活力が失われ、一九九二年には県内の都市部で唯一、過疎指定を受けることになり、八幡浜港も二〇〇〇年には地方港湾(特定地域振興重要港湾)に港格変更されました。こうした状況を打開する

ため、市では、港を中心に発展してきた当市の成り立ちを踏まえ、「みなとまち八幡浜の再生」を基本理念として、二〇〇二年三月に「八幡浜港振興ビジョン」を策定しました。

この振興ビジョンは、八幡浜港の個性を生かした「みなとまちづくり」の推進を掲げています。八幡浜港の個性(特異性)は、港湾区域の中に漁港区域があること、フェリーターミナルと魚市場が隣り合わせにあるということとです。八幡浜は「魚の町」としての認知度が高く、この効果を最大限に活用し、魚市場に観光資源としての魅力を付けることが必要です。八幡浜の特産品である水産物や農産物を利用した観光魚市場などを整備し、年間約四十万人のフェリー利用客等の来訪者を引きつける空間を整備し、賑わいあふれる「みなとまち八幡浜」を再現させることを目指しています。

### やわたはま海鮮朝市

この振興ビジョンを実現させるには、市民が、港に交流人口を増加させて、街の活



海鮮朝市

性化につなげるという方向性を共通に持ち、港の再開発を皆でやろうという機運を高めることが最初のステップでした。

そこで、まず、港から発信するまちづくりを行うため、それまで年一回の開催だった朝市を、「やわたはま海鮮朝市」と銘打ち、

〇二年から月一回の開催にしました。

毎月第二日曜日、魚市場を会場に、鮮魚、じゃこ天などの水産練り製品、地酒、柑橘等の地元農産物など八幡浜の物産を集めて、約四十店舗が並びます。誰でも無料で利用できるバーベキューコーナーでは、買ったばかりの魚を焼き、朝市食堂では名物じゃこ天うどんに行列ができます。毎回約五千人の客で賑わい、三時間余りで売り切れます。集客を図るためイベントにも力を入れ、八幡浜高校商業研究部「A★K I N D（アキンド）」もスタッフに加わって、「ミニせり」お魚ママさんのお魚さばき方教室「みんな集合！ちびっこ釣堀大会」などを開催。イベントキャラクター「浜爺」を作成し、朝市オリジナル手ぬぐいやTシャツも作りました。

海鮮朝市の来場者は、市外からの客が半数以上を占め、この海鮮朝市が振興ビジョンに掲げた観光魚市場の実証実験となり、「魚」で市外から人を呼び込む手応えを感じました。

## 八幡浜港みなとまちづくり協議会

海鮮朝市の一層の充実を図るとともに、八幡浜港振興ビジョンの実現に向け、現在

行っている活動をより活性化・拡充していく、中心商店街との一体的な賑わいあふれる安全で安心な「みなとまちづくり」を目指すものとし、雇用創出や観光客誘致などによる地域活性化を協議するため、二〇〇三年、八幡浜港みなとまちづくり協議会とワーキンググループを設立しました。いわば「知恵袋隊と行動部隊」で、港湾利用者をはじめ学識経験者、水産・交通・商工・農水・女性団体・県・市・教育・マスコミ・ボランティア関係など市内の「産・民・官・学」各界各層のメンバーで構成されており、誰でもいつでも気軽に参加できる組織となっています。

活動として、市民フォーラムの開催、みなとまちづくりプランの策定、みなとづくりコンペの実施などにより、市民の立場から「振興ビジョン」の実現を見据えた取り組みを行っています。また、フェリー乗降客や観光客を、港から中心商店街や歴史的名町並みへ誘導するため、毎回約五千人の来場者がある「やわたはま海鮮朝市」を核としたさまざまなイベントや社会実験を実施してきました。

ここで主な活動を紹介します。

### 【体験型ツアー実施】

①海鮮朝市「みなとまち」まるごとツアー  
松山市からツアーモニターを募集。JRで来浜し、海鮮朝市で好きな魚を購入、その魚を商店街の飲食店に持ち込み料理してもらい、その待ち時間に、ガイドの案内で古い町並みを散策、昼食後にバスで市内観光、という社会実験イベント。松山市をターゲットに、ツアーが成り立つか、また、海鮮朝市会場から商店街へ客を誘導する方策などを探りました。

②海鮮朝市「みなとまち」探訪ツアー  
大分県臼杵市でモニターを募集し、海鮮朝市と商店街、周辺の町並みが一体となったツアーとフェリー船上を舞台に観光交流を行いました。

フェリーの公益性に着目した社会実験イベントを通じ、通過客となっているフェリー利用客に「みなとまち八幡浜」を印象づけ、リピーター増加策につながる方策を探りました。

③海鮮朝市「みなとまち」マル得体験ツアー  
過去実施したものをバージョンアップし、一泊二日で実施。モニターは松山市や大分県臼杵市で募集。具体的には、ミカン摘み体験、

ミカン選果場見学、魚市場のセリ、古い町並みを散策、農家の繁忙期に行う炊き出しでの昼食、郷土料理の試食を行いました。

このように八幡浜を「まるごと」知ってもらったツアーは好評で、今後、ここにはできない体験型ツアーの商品化の検討や振興ビジョンに連動した観光振興策につなげていきます。

#### 【市民講座・フォーラム】

市民によるまちづくりを実践するためのオピニオンリーダーの発掘・育成と当協会委員の研修を目的に開催。

##### ①みなとまちづくり市民フォーラム

約二百人の参加により開催。市民講座では、松野町「森の国ホテル」営業マネージャーの隅田深雪さんが、「自分も楽しむ観光」をテーマに講演。市民によるパネルディスカッションでは、高校生もパネラーに招き、ステージ上のパネラーと会場とのディスカッションを試み、港を中心とした地域振興と活性化などの意見を出し合いました。

##### ②みなとまちづくり市民講座

約百人の参加により開催。市民講座では、青森県「大間まちおこしゲリラ隊 あおぞら組」組長の島康子さんが、「海は世界とつな

がっている！」をテーマに講演。また、日本大学総合科学研究所教授・新井洋一さんが「みんなで作るみなとまち八幡浜」をテーマに講演。市民によるグループワークでは十二のグループに分かれ、「みなとまちづくり」をテーマとして活発な意見交換を行いました。

#### 【レトロな町並み散策と宇和海クルーズ】

海ネット通常総会に合わせて開催。保内



町並み散策

ボランティアガイドの会、八幡濱みてみんな、八高「A★KIND」の協力のもと、海ネット関係者、一般市民を対象に、町並み散策、ミニクルーズを実施するとともに物産販売やじゃこ天作り体験を行いました。

#### 【八幡浜湾クルーズ】

小型漁船で八幡浜湾内をクルージング。リアス式海岸の半島や無人島の自然美、入航する漁船やフェリーとのすれ違い、養



高校生による物産販売

殖いかだの荷揚げ作業が面白く、顔に当たるしぶきが心地よいと好評でした。

### 【みなとづくりコンペ】

八幡浜港振興ビジョンのうちフェリーターミナル関連施設エリアに有効な施設は何か、アイデアを広く募集し、市内外より七十七点の提案をいただき審査しました。

### 【アンケート調査】

イベント、社会実験の実施に合わせ、数多くのアンケートを実施しました。

海鮮朝市来場者アンケートの買い物金額の調査では、千～二千円の買い物をする人が三割、二千～五千円が四割で、経済効果は、約千五百万円と推定することができました。

フェリー利用客アンケートでは、出発までの待ち時間は、四十分以内が六割、そのほとんどが車内・待合室で待機。これは、一時間に一本という便利なダイヤ故に八幡浜が通過点になっていることの証明でした。

### 【八幡浜港振興ビジョン実現に向けた

### まちづくり提言書策定】

協議会が五年間にわたり実施した社会実験、アンケート調査、イベントの結果をもとに、港を核とする地域再生に向けた提言

書を策定し、二〇〇八年二月十三日に市長へ提出しました。

### 「八幡浜港振興ビジョン

### 実現に向けたまちづくり提言」

- ・八幡浜の魅力の認識
- ・交流人口拡大プランの実施
- ・人にやさしい施設整備
- ・安全・安心のまちづくり
- ・地元との協働
- ・域外との活動交流
- ・まちづくり推進体制の維持

### おわりに

八幡浜市は、今日まで、土地不足を解消するため、港湾開発のプロジェクトを最優先施策として埋め立てを積極的に進めてきました。この海に向かって開発してきた歴史を振り返ると、市民や地域全体に活気が

みなぎり飛躍的に市勢が伸展してきたことから、「みなと」の再開発こそが八幡浜市の活力源だと言われています。将来のグランドデザインである振興ビジョンが実現する

と、年間約四十万人のフェリー利用客の足止めを含め、来訪者を引きつける賑わいあふれる港となり、中心商店街との連携を図

ることで、港から街全体に活力が波及すると確信します。

一方では、今まで主に生産市場としての役割と機能だけであった魚市場の近代化と観光資源化によって、各地から水産物が集まり、「みなと」から地域全体に計り知れない経済効果をもたらすものと思われま

す。現在、振興ビジョンは、埋め立てが完了し、二〇一三年四月の業務用魚市場の開業に合わせ、各種施設整備も最終局面を迎えています。

私たち、八幡浜港みなとまちづくり協議会では、「四国の西の玄関口」という個性を生かしたこの「みなと」整備によって、地域や産業活性化の道が開けると信じ、行政と連携をとりながら、側面支援を続けていきます。

また、ワーキンググループは、施設の完成後を視野に入れたソフトの充実、新たな仕組みづくりに向け、具体的な活動を展開しています。

このように、産・民・官・学が一体となつてみなとの賑わいを創出し、八幡浜のまちの活気を再生していきたいと考えています。

(たにもと のりお)

# みなとまちを交流の舞台に

## ——みなとまちの人情と魅力を語る

スロートーリズム研究者

明戸 真弓美

### 日本ぐるっと一周・

#### 海交流プロジェクト

「海から日本を訪ねてみよう」——そんな呼びかけを全国の海沿いの自治体に行った。当時は平成の大合併前だったが、お願い文を送る郵送費さえ心配になるようなプロジェクトだった。「日本ぐるっと一周・海交流プロジェクト」は、日本開国百五十周年を記念して、二〇〇二年に始まり、三年計画でヨット、モーターボート、漁船などによる日本一周航海をリレー形式で行い、旗と親書を届けるというものだ。全国の港に寄港して、さまざまな海の連携ネットワークを構築することを目的とした。一年目に十市町村、二年目に二十一カ所、三年目の春には、全国を六ルートに分けて日本を本当にぐるっと一周することになった。ルートを一人で回った所

もあったが、何人かで分担して港々をつないでいった所もあった。港で出迎えてくれたのは、市町村や漁協の職員、漁師さん、地域のまちづくり団体、子ども達……。体験乗船会を開いて子ども達をヨットに乗せた所もあった。地方新聞社に情報を流して数多く記事にはしてもらったが、それほど宣伝費もかけていないので、大歓迎の所も小歓迎の所もあった（注1）。結果、回った港は全部で二百八カ所、直接かかわった人だけで三千人ちよつと。まさに津々浦々の港から港へと海を横移動し、船着き場管理者に連絡を取り、地元の人と大いに交流し、緩やかなネットワークを作るきっかけはできた。

「協力しないのは普通の人、協力してくれるのは良い人」と豪語するたぐいまれる田中栄治という人物と彼の会社、「NPO 法人・地域交流センター」の壮大なる挑戦

だった。が、当たって砕けた、に近い。プロジェクト自体は大赤字で、国は後援をくれただけで最後まで調査としては乗らなかつたし、結果、海もみなとまちもそれほどラステイックには変わらなかつた。というよりは、時間をかけて変わるのが日本の社会なのだろうと思う。しかし、最初の思いから相当トーンダウンしていることは否めない。それでも、ちよつと大きな港に行けば「海の駅」の看板を見つけるようになったという事実はある。全く案内人もいなければ、地域情報もない、トイレはどこかを探せばあるかもしれないけれど、交流について言えば「こ」の字もない。野菜はあるけど交流までいかない「道の駅」の二の舞いだと思うけれど……。しかし、私自身はといえば、この企画で得たものは多かつた。六年たった今でもその時お会いした人々とは、電話

をもらったり、訪ねていたりすることも  
あるし、時々みなとまちについて書く機会  
を得て、ぶつぶつと不平を言わせてもらっ  
ているのもありがたい。

みなとまちは古来、人々と物が行き交う  
交流拠点として栄えてきた。歴史と文化が  
色濃く残り、人情の厚い人々がいて……。  
しかし、大きい港はハードは整備されたが、  
ヒューマンスケールでないため人がいない。  
地方の小さいみなとまちとなると、好景気  
の時代には一番取り残された場所になった。  
賑わいどころか、むしろ閑散としているの  
だ。でも、こういう所こそ日本の良いこ  
ろがまだまだ残っている。これは間違いない、  
確信できる。

### 船でみなとまちを訪ねる

三年目のプロジェクトの私の担当地域は、  
北東北と北海道。まずは北東北の八戸、大間、  
青森、鯨ヶ沢、深浦、秋田、本荘、酒田、そ  
の後に北海道の標津、根室、花咲。毎週末  
になると、電車や新幹線に乗って出かけては  
フラッグにサインをしてもらって、写真を撮  
り、港事情について話を聞いた。それぞれは、  
筆舌しがたい一回限りの貴重な体験だった。



秋田の本荘マリーナにて記念撮影

八戸から大間では、途中イカとサバを釣っ  
て食べ、仏ヶ浦の巨大な奇岩・怪岩を見た。  
途中、煌々と明かりを灯した無人のイカ釣  
り船を見た時は不気味さを感じた。船を迎  
え入れた大間では、ちょうどオリンピック年  
で地元出身の柔道選手をガソリンスタンド  
にしつらえられた巨大テレビで町民と応援  
した。経済が安定していると子どももたく  
さんいる。元気な町だった。青森に行くには  
まず函館、「スターダスト」の船長と朝の市  
場に行つて、食堂の新鮮なイカ刺しを食べ、  
金森倉庫の前に停泊している「勸進丸」に

乗り込んで、「青函カップヨットレース」に  
同行した。この函館の料理好きな船長のヨッ  
トにはダッチオーブンが積んであって、停泊  
所ではごちそうになった。出発を待っている  
とロシア人も見かける。無線の中継ヨット  
だったが、荒波の津軽海峡を越えて青森ま  
で行ったが、途中で下ろしてくれと言いたい  
くらい船酔いした。陸奥湾に入ると波が静  
かだ、船の立てる波の中の青白い夜光虫が美  
しかった。青森港に到着したのは夜ふけだ。  
青森港の三角形のアスパム（青森県観光物  
産館）が見えた。青森ではセーリングクラ  
ブの会長にお世話になり、ねぶた、三内丸山、  
魚の仲卸業について駅前で本当に貴重なお  
話を聞いた。鯨ヶ沢ではミニ白神で観光客  
を誘致した職員の話聞き、深浦では大き  
なウミネコのいる港から円覚寺えんがくに登つて、奉  
納された船絵馬を見た。秋田の本荘マリー  
ナ長には、いつかお返しにおおると約束して  
お酒をご馳走になった。山形の酒田も良かつ  
た。船長の奥さんが町中を案内してくれて、  
本間家旧本邸や黒壁の山居倉庫を見学して、  
だだちゃ豆アイスクリームがおいしかった。

北海道は、道東の標津へ到着すると、船  
歓迎の祝宴をやっていて、とんでもない量の

北海シマエビやカニやホタテの海の幸料理があり、修学旅行の誘致を旅行社と一緒に行っていた職員の話聞いた。この小さな自治体がというくらいの仕事である。やっぱり仕事は人だと思った。翌日の標津から根室への納沙布岬越えはすさまじかった。一緒に東京から行った女の子は船酔いで気分がすぐれなかったようだが、もうちよつとでロシアの領海に入りそうになって海上保安庁に注意されながら越えた。これらの冒険を笑いながら話す夜の酒がまたおいしい。根室では水先案内をもらった「サテンドール」の船長に、花咲港のカニの店に連れていってもらい、室風に七味でごちそうになった旬のサンマの刺し身のおいしさに舌鼓を打った。北前船の高田屋嘉兵衛がこんな北海道の端っこまで来て金刀比羅神社を建立したんだというのも驚いた。

これ以外にも、静岡の下田、伊東、愛知の半田、三重の鳥羽、山口の下関にも行った。下田は古い良港だ。夕暮れ時の鏡のような海に松と岩陰、こんなに美しい景色は見たことがない。縦付けにしたヨットを下りると、釣りをしている人が岸壁にいてアオリイカを釣ってるんだと言っていた。下田は歴史的に重要な地だっただけに、陸もうんと面白い。おいしい魚料理も。青森の浅虫にもあるが、静岡の伊東のマリントウンにも、オーシャンビューの温泉がある。下関・豊浦のフィッシュアリーナむろつのは水はきれいだったなあ。巖流島にも行った。この時の区役所の人が仕事の後に連れていってくれて食べたラーメンもおいしかった。役所の人もいろいろいる。人生は出会った人と一緒に楽しむのがよいと思う。あとは鹿児島<sup>かごしま</sup>の笠沙、山口の阿武<sup>あぶ</sup>、兵庫の香住、北海道の函館……。別の仕事で三陸の宮古や釜石にも行ったなあ。みんなどうしてるかなあ。元気にやってるんだろか。今でも会う人がいる一方、しばらくごぶさたしている人もいる。

鹿児島<sup>かごしま</sup>の笠沙では、この町自慢の笠沙恵比寿という宿泊所に泊まり、町長さん自ら野間岳の神社まで案内してくれた。デザイン・水戸岡鋭治氏設計のこの宿泊所は素晴らしくて、可愛らしいお茶の間風の部屋、おいしい魚料理、野間池港を見渡せる浴場フロントで申し込んで漁船でイルカも見えた。建物の裏側に地元<sup>じもと</sup>の漁師さんが集まる一杯飲み屋があり、満天の星空も素晴らしかった。山口の阿武、JR宇田駅で降りると目の前は海、てくてく歩く。宇田漁港近くの民泊「はまべのすたじお」に泊まって、Uターンで地域づくりを頑張っている漁師さんからグリーンツーリズムやブルーツーリズムについての熱い話を聞いた。清ヶ浜の白い砂浜は歩くとキュッキュッと鳴く。町で購入したクリナーを町民がボランティアでかけて、鳴くまでに七年かかった。兵庫の香住で行われた環日本海のヨット仲間の懇親会にお邪魔した。二月の日本海の荒波とどろく海沿いの旅館で食べたカニ料理もおいしかった。余部鉄橋<sup>あまべ</sup>も見に連れていってもらった。北海道の函館の船からみんなで見ただ花火も良かった。

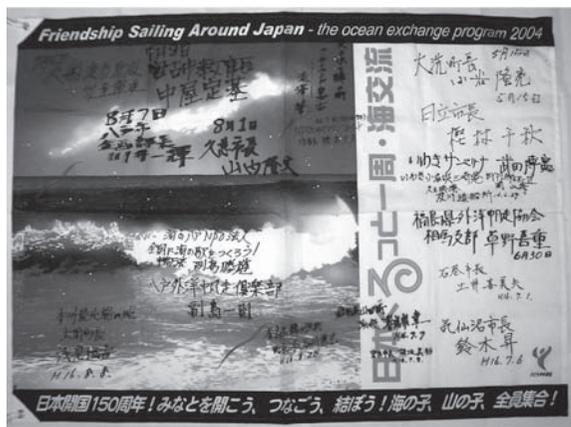
仕事以外でもよくいろんなところに連れていってもらったり、行ったりした。ヨットで行ったのは、関東では千葉の保田<sup>ほた</sup>、神奈川の横浜、三崎、浦賀、東京の大島、新潟では粟島。最初に連れていってもらったのは保田で、東京湾を最短で横切れば、鋸山<sup>のこぎり</sup>が見えてくる、保田漁協のやっているレストランの魚料理がおいしい。カツオドリの赤ちゃんが海に浮かんでいるのや、東京湾に行儀よく一列に並んでいるタンカーを見た。夕暮れに横浜のライトアップされ

て白く輝くベイブリッジの下をヨットでくぐった時は夢を見るようだった。三崎を夜中に出発して大島へ行く時に甲板から見た星の美しさも忘れ難い。外洋に出るとうねりはキツかった。前の船が波間に見えなくなるくらいだった。朝、ヨット「プログレス」の上で食べた卵焼きとみそ汁の朝ごはんもおいしかった。三崎も古い港だ。高台にある本瑞寺からの眺めは素晴らしい。マグロのかぶと焼きも食べることができる。

新潟の粟島は、夜行バスに乗ってまずは新潟。ここのヨットクラブが拠点になっている「浜茶屋」の二階からの海の眺めが素晴らしい。粟島に上陸して港にテーブルを出して食べた、野菜のたくさん乗ったゆでたてのそうめんもおいしかった。巨大なタイの刺し身、みそ汁に焼酎石を入れるわっぱ煮、この小さな島には実においしいものがたくさんあった……。こんなわけで、「海交流」担当者として、とてつもなく愉快な経験をさせてもらったのだった。この経験は私のスロートリーズムの原点になった。

## 海とみなとまち

交流をしようと思ったら、人を訪ねる旅



多くの人にサインをもらった「日本ぐるっと一周・海交流」フラッグ

をするといいい。人とのつながりが希薄になった現代だからこそ、人との出会いを大切にしたい。つながりつづけよう。そして船酔いしない体質になるともつと楽しめる。「船に十日も乗ってたら慣れる」という言葉を信じて乗っていたら、今やどんな乗り物にも酔わなくなるくらいになってしまった。まさに、人には添うてみよ、馬には乗ってみよ、そして船にも乗ってみよ、である。海は圧倒的に男の多い世界で、スパルタで、きちんとした知識と技術がないと命も失う世界

だ。一方、みなとまちは女のイメージ。おいしい魚料理と、威勢のいいお母さん達。そして「海交流」には別れがつきもの。素敵なお別れをしてくれたのは、青森大間の「まおこしゲリラ集団あおぞら組」の方々。赤ちゃんをおぶった女性もいて、大漁旗を振って明るく送り出してくれた。

「海交流」プロジェクトのすべてが終わったところ、おまけのように全国イベント大賞にノミネートされた。対するは、かの「打ち水大作戦」。ダークホースの意味も知らず、事務局からの連絡で最終選考の赤坂の会場に行った。結果、大賞はのがした。選考委員の多くが予想外にこの企画に投票した理由は、プレゼン資料の「海から日本を見たことがありますか?」の問いかけに心を動かされたからだと聞いた。つまり、縦割りや閉鎖的な、海とみなとまちについて、きつと多くの人が同じことを考えているに違いないから。少しずつよいから変わってくるといい。みなとまちには熱い人々がいる。今後に期待したい。(あけど まゆみ)

注1…本州西ルートの毎日の様子は柏崎ヨットクラブのHPに詳しく。  
<http://www.kisnet.or.jp/~kichi/index.html>

# 「観光」に「サイエンス」を

## ——観光統計を活用した実証分析に関する論文募集について

国土交通省観光庁参事官室（観光経済担当）

### 数字と観光

近年、観光を通して地域の活性化を実現しようと、全国各地でさまざまな取り組みが広がっている。

これは、人口減少・少子高齢化が進展するなか、活力ある地域社会を実現するための方策として、国内外から人呼び込み、交流の輪を広げることが重要性を、多くの方が認識していることが背景にあると考えている。

毎号、人々の内面や行動の背景にある文化を含め、広い意味での観光に関する優れた論考が掲載される本誌をご愛読されている皆様の中にも、自らが暮らす地域の観光振興について、日頃から関心を持たれている方がいるかもしれない。

では、地域の観光振興に取り組み場合、

考えるべきことは、そして取り組むべきことには一体何があるだろうか。

自らの足で地域を歩き、五感を使って地域の実態を感じること、地域の歴史について著された書籍に目を通し、現在の風景に至るまでの人々の行動と思いを丁寧にとどめることも大切なことである。

しかし、すそ野が広い観光という分野の活性化を図るためには、多くの方の協力が必要であり、共に取り組む人々の輪を広げ、思いを共有するためには、地域の実情を、多くの人々が理解可能な、数量的な表現にしていくことも必要である。

宿泊施設は何軒営業して、毎年どのくらいの観光客が利用しているか。どこで買い物をして、食事を楽しんでいるのか。また、毎年開催されるイベントに何人の人が足を

運んでいるのか。

すそ野が広い観光の実情を把握し、観光振興に向けた取り組みの方向を決めるためには、さまざまな面の正確なデータが必要不可欠である。

### 観光に関する統計の整備

前項において、実態を示す数字の重要性について述べたが、二〇〇六年十二月に成立した「観光立国推進基本法」においても、「観光に関する統計の整備」がうたわれている。

これは、「住んでよし、訪れてよし」の観光立国の実現のためには、土台となる観光統計の整備が重要であることが、関係者の間で広く認識されていることの表れとも言える。

ではここで、現在の観光に関する統計の

整備状況とその内容についてご紹介したい。

### ●「宿泊旅行統計調査」

宿泊旅行の実態を明らかにするため、従業者数十人以上の施設を対象として、二〇〇七年より調査を実施している。

本調査結果は、各都道府県における宿泊旅行の実態の把握などに活用されているが、より網羅的に把握するため、二〇一〇年度調査より、従業者数十人未満の施設に対しても、調査範囲を拡充したところである。

### ●「旅行・観光消費動向調査」

旅行・観光における消費額を把握することで、旅行・観光の経済波及効果の推計・分析などに資することを目的に、二〇〇三年度から日本国民を対象に調査を実施している。

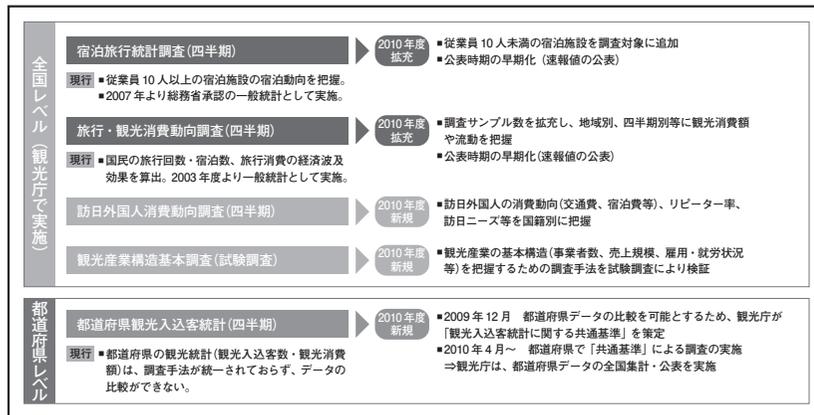
二〇一〇年度調査より、調査対象者数や調査項目を拡充したところである。

### ●「訪日外国人消費動向調査」

訪日外国人の旅行消費の動向を的確に把握するため、二〇一〇年度より新規に、

四半期ごとに全国十一の空海港で調査を開始した。国籍などの基礎情報のほか、品目別の消費額などを把握することにより、ニーズに応じた受け入れ態勢の整備、効果的なプロモーション活動の実現を図

図 観光統計調査の概要



りたいと考えている。

### ●「観光産業構造基本調査」

観光という活動は、地域経済の活性化や雇用機会の増大などに資するものであるが、観光に関連する事業所の数、雇用者数などの基本的な構造については整備が遅れていたため、試験調査を実施することとしている。

### ●「都道府県観光入込客統計」

これまでは、各都道府県における観光入込客統計の手法が異なっていたため、比較・検討することが困難であった。

このため、都道府県関係者との連携のもと、観光入込客数と観光消費額単価、観光消費額(総額)を測定する「共通基準」を作りあげたところである。

これにより、各都道府県における実態を同じ物差しで測ることが、いよいよ可能となる。

以上、ご紹介した通り、観光庁では基礎的な統計整備を進めているところであるが、ご興味のある方は観光庁ホームページ(統

計情報)をご覧いただければ幸いです。

## 観光統計を活用した 実証分析に関する論文の募集

これら観光統計が、行政・民間における観光振興に向けた取り組みの基盤としての役割を果たすためには、多くの研究者・実務者などに実際に活用されることを通じて、科学的・実証的アプローチに基づく観光振興施策が実施されていくことが何よりも重要である。

このため、次世代を担う観光政策の研究者・実務者の研究を奨励するとともに、観光立国の実現に向けた取り組みの活性化に資することを目的として、二〇〇九年度から、「観光統計を活用した実証分析に関する論文」の募集を行っている。

今後も、観光に関する統計・データが幅広く活用されることを期待しつつ、本年度においても当該論文の募集を行う予定である。

## 二〇〇九年度入賞論文について

第一回目となる昨年度は、募集に対して学校関係者を中心に、延べ三十人から全

十六編の応募があり、応募論文の傾向としては、統計モデルの構築など、非常に高度かつ専門的な論文、地域観光活性化の取り組みに有用な論文のほか、基本的統計手法を用いて有用な政策提言に結びつけている論文が多く見られた。

また、検証対象となるエリアについても、日本全国を対象としたものから、広域圏に焦点を当てたもの、そして限定された地域に対して集中的に目を向けたものなど、さまざまな設定がなされており、観光庁が実施する宿泊旅行統計調査をはじめ、さまざまな統計の活用を通して、幅広い視点からの分析が展開されていた。

### 【二〇〇九年度 応募者内訳】

大学教授 一人  
地方公共団体職員 三人  
大学准教授 六人  
シンクタンク 四人  
大学院生 十一人  
塾講師 一人  
大学生 四人

計三十人



表彰式の模様 (2010年3月9日：合同庁舎7号館 金融庁13階共用会議室)

審査にあたっては、有識者による審査委員会において、科学的・実証的アプローチに基づく、具体的な分析・考察がなされているか(具体性)、国や地方公共団体、観光関係団体における諸活動に対して有用な分析であるか(有用性)などの観点から評価を行い、二〇一〇年二月二十六日、長官

賞二編および審査委員会奨励賞一編を決定した。

(注) 受賞者名、受賞論文名および論文の概要については下表に掲載。

## おわりに

観光はすそ野が広い産業だといわれている。人が動くことに伴い、モノが動き、そしてさまざまなサービスが発生する。

これまで、ともすれば観光振興という言葉は、観光事業に従事する人々など、限られた方にしか響かなかった面もあると感じている。しかし、観光立国を実現するためには、その意義を一人でも多くの方に理解していただくことが必要であり、観光庁は、この重要な仕事に先陣を切って取り組みなければならぬと強く認識している。

観光立国の実現に向けた取り組みを下支えする観光統計の整備は、まだ始まったばかりである。

正確なデータに根付いた、説得力のある、効果的な観光政策の展開――。

観光に「サイエンス」の光を当てることで、一人でも多くの方の生活を、豊かにしたいと考えている。

### 2009年度 受賞者等の概要

	観光庁長官賞 (2編)		審査委員会奨励賞 (1編)
主 題	観光統計を活用した地方の観光構造に関する空間分析～越境圏での観光特性分析および交通インフラ整備による観光経済分析を例に～	地域連携効果を考慮した訪日外国人宿泊数予測モデルの構築	北海道における宿泊者数の季節変動に関する考察
受 賞 者	山陰観光経済分析グループ (グループ応募：5人) 山根啓典、佐藤啓輔、吉野大介 (復建調査設計株式会社) 小池淳司 (鳥取大学大学院工学研究科准教授) 村上亨 (松江工業高等専門学校数理科准教授)	清水哲夫 (東京大学大学院工学系研究科准教授)	朝倉俊一 (株式会社ドーコン)
概 要	狭域的な地域の観光実態把握として、既存の観光統計では分析が難しい県をまたぐ越境観光圏を対象に、新たな観光周遊調査を行い、観光特性に関する空間的分析を行ったほか、広域的な地域を対象に、空間分析モデルを活用することで、地方部の観光周遊に大きな影響を及ぼす交通インフラ整備が観光産業へ与える効果分析を実施。	訪日観光市場において、都道府県が広域連携を模索した場合の宿泊数を予測できる統計モデルの構築を試み、構築したモデルを用いて、連携地域が変化した場合の宿泊数増減についての感度分析を実施。	国内平均との比較で季節変動の激しいことが、観光産業の競争力向上に向けた課題となっている北海道を対象に、宿泊旅行統計調査等を用いながら、北海道観光における季節変動の要因を実証的に分析。

2009年度表彰論文および2010年度募集のお知らせは  
観光庁ホームページをご覧ください。



\* 2010年度募集については、要項等が固まり次第、ホームページに掲載いたします。

<http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/ronbun.html>

#### 【問い合わせ先】

〒100-8918 東京都千代田区霞が関 2-1-3  
国土交通省観光庁参事官室 (観光経済担当)  
Tel : 03-5253-8325 Fax : 03-5253-1563  
観光庁ホームページ  
<http://www.mlit.go.jp/kankocho/index.html>

# 日本人旅行者誘致に向けた海外各国のイメージ戦略 ——競合国との差別化・新イメージの浸透と、日本への応用

財団法人日本交通公社 旅の図書館副館長

朝倉 はるみ

## 海外各国による日本での情報発信

海外各国の在日政府観光局・大使館等は、日本人観光客誘致のために日本国内で旅行会社やマスコミ向けに説明会を開催しています。こうした機会では、日本人にどのようなイメージを定着させるか、何がその国あるいはエリアの最大の魅力なのか、という情報が提供されます。今回は、あまり日本人旅行者が多くない海外エリアのイメージ戦略と、日本の観光地への応用について考えました。

## アフリカ——「サファリ」の差別化

二〇一〇年六月十一日から一カ月間、南アメリカでサッカー・ワールドカップが開催されました。アフリカ大陸で初めての開催であり、これをきっかけに南アメリカ以外の国も日本人観光客誘致に力を入れようとしています。例えば、

二〇〇九年にはケニアとボツワナが東京で旅行会社を対象に説明会を開催しました。この二カ国はいずれも「サファリ」を観光の目玉としていますが、それぞれ「その国ならではのサファリ」を誘致の柱にしています。なお、「サファリ」は東アフリカで用いられているスワヒリ語で「旅」を意味しますが、現在は野生動物を鑑賞するツアー（通常は数時間）を指し、アフリカのさま

図1 ケニアとボツワナの位置



ざまな国で観光客用に実施されています。

ケニアはアフリカ東部の赤道直下に位置し、マサイ・マラ、アンボセリなど五十六もの国立公園・国立保護区があります。これらの国立公園は、『野生のエルザ』の著者夫妻が滞在したり、映画『愛と哀しみの果て』の舞台となっています。マサイ族の集落訪問もケニアの魅力の一つです。

ケニアのサファリは、「大量の動物を見られる」というのが魅力の一つです。国の南西部に位置するマサイ・マラ国立保護区は隣国タンザニアの「セレンゲティ国立公園」と接しており、毎年百五十万頭もの「ヌー」の大移動が見られますし、レイクナクル国立公園では最盛期に百万羽のフラミンゴを見ることが出来ます。アバーディア国立公園、マウントケニア国立公園には、動物たちの水飲み場ともなるプールを持つホテルがあり、水を飲みに来る動物たちを夜間に間近に見るといって貴重な体験もできます。



ケニアのサファリで見られるヌーの大群  
(写真提供：ケニア共和国大使館)



ケニアのバルーン・サファリ  
(写真提供：ケニア共和国大使館)



ボツワナのリバークルーズ船  
(写真提供：ボツワナ共和国大使館)



ボツワナのリバークルーズでは、こうした  
野生動物を間近に見ることができる  
(写真提供：ボツワナ共和国大使館)

また、さまざまなタイプのロッジも、サファリとともにケニアの魅力として位置づけられます。

一方、南アフリカの北側に隣接するボツワナは、ケニアとは異なる「水のサファリ」をセールスポイントとしています。ボツワナには世界最大、約一万五千平方キロメートルの内陸性デルタ「オカバンゴ湿地帯」があるからです。湿地帯の中をボートで進み動物を眺める「ボート・ライド（リバークルーズ）」や、水路の中にできた中州に上陸して歩いて動物を観察する「ウォーキング・サファリ」、伝統的なカヌー「モコロ」で浅い湿原を巡る「モコロトリップ」等、ケニアの「陸の」サファ

リ」とは違った魅力があるのです。湿地帯周辺の高級ロッジの客室やレストランは水路に面して設置され、いつでも水辺の動物を眺められるようになっています。また、ナミビアとの国境を流れる川に面したチヨベ国立公園でも、水を求めて集まってくる動物たちを楽しむことができます。大手旅行会社のツアーパンフレット（注1）を見ると、ケニアを訪れるツアーではサファリのほかに高級ロッジや、「バルーン・サファリ（熱気球でのサファリ）」が魅力としてアピールされ、ボツワナを訪れるツアーでは「ゾウの生息地として有名なチヨベ国立公園のチヨベ川でボートサファリ」が多くのツアーに組み込まれています。アフリカは非常に広大で旅行会社のツアーも数カ国を周遊するコースが多いため、各国のサファ

リの独自性を明確にすることが必要なのです。

## 中欧三方国の「パールロード」

バルカン半島北部、中央ヨーロッパ（中欧）に位置するハンガリー、スロヴェニア、クロアチアの在日政府観光局は、三方国を巡る周遊ルートを「パールロード（真珠の道）」として、二〇〇八年から日本の旅行会社や消費者に提案しています。名称の由来は、ドナウの「真珠」と呼ばれるハンガリーの首都ブダペスト、プアルプスの「真珠（瞳）」と呼ばれるスロヴェニアのブレッド湖、アドリア海の「真珠」と呼ばれるクロアチアのリゾット地ドゥブロヴニクと、各国の魅力を表す共通語「真珠」から名付けられました。これらの国はいずれもハプスブルク家の支配

図2 パールロード3カ国の位置



下にあった歴史を持ち、数々の世界遺産や中世の美しい町並み、豊かな自然風景を有しており、三方国の共通テーマとして「ワイン」を取り上げ、「パールロード」のルートの中でワイナリー巡りやグルメの魅力もアピールしています。ルートに日本人がまだあまり訪れていない地方を組み入れ、各国の特徴を生かした中欧旅行の新しいスタイルを定着させることで、ハンガリーは南部への観光客誘致、スロヴェニアは滞在日数の長期化、クロアチアはドゥブロヴニク以外の観光客の分散を目指しています。

しかしながら、二〇〇九年は中規模旅行会社社がこのルートを商品化したものの集客不足でツアー催行には至らず、二〇一〇年上半年の大手旅行会社のツアーパンフレット(注1)でも、中

欧を巡るツアーはチェコやオーストリアとパールロード三方国のいずれか一方国または二カ国を組み合わせたものが大半です。クロアチアとスロヴェニアを巡るツアーはありますが、「パールロード」三方国を巡るツアーは設定されていません。こうした現状を踏まえ、パールロードの商品化と確実な集客、消費者へのイメージ浸透を狙ったパールロードのプロモーションセミナー開催や、旅行会社並びに消費者を対象としたパールロード小冊子作成等を今後計画しています。

### 日本人観光客誘致のためのイメージ戦略

「物」は購入前に「試しに試してみる」という



“ドナウの「真珠」”—ハンガリーのブダペスト (写真提供：ハンガリー政府観光局)



“アルプスの「真珠」”—スロヴェニアのブレッド湖 (写真提供：スロヴェニア観光局 J. SKOK)



“アドリア海の「真珠」”—クロアチアのドゥブロヴニク (写真提供：クロアチア政府観光局 Mario Brzić)

ことができず、「旅行」は「試しに行ってみる」ことができません。したがって、観光地に対して消費者がどのようなイメージを抱いているかが、観光客誘致には大変重要です。

インターネットによる情報収集が容易になったとはいえ、日々の生活の中で接する情報量が少ない国やエリアであれば、消費者はそのイメージが浮かばない、あるいはその周辺諸国とのイメージの錯綜・混乱が想定されます。そこで、ケニアやボツワナのように、「その国にしかない魅力・イメージ」の情報を消費者や旅行会社に発信していくことが、日本人旅行者誘致を目指す国やエリアの観光関係組織には必要となります。

しかしながら、そうしたイメージはすぐに定着するわけではありません。例えば、ドイツの「口

「マンチック街道」は外国人観光客向けPRを目的に一九五〇年に誕生し、その後継続してPRに活用されているため、現在では世界中から観光客を集めています。日本で発行されるドイツのガイドブックや旅行会社のツアーにも、「ロマンチック街道」はよく取り上げられています。

前述した中欧三方国のうち、クロアチアとスロヴェニアは一九九一年にユーゴスラビアから独立した新しい国であり、他のヨーロッパ諸国に比べると日本での知名度が低い可能性があり、「パルロード」も在日政府観光局が提案してからまだ二年弱しかたっていません。日本の消費者や旅行会社に「パルロード」という名称や各国の観光地のイメージを定着させるには、在日政府観光局による取り組みの継続が不可欠なのです。

また、海外旅行者を送り出す日本側と、誘致する側（海外各国）で、誘致エリアの認識が異なる場合もあります。観光立国の目標の一つ「海外旅行2000万人」達成を目指すためのビジット・ワールド・キャンペーン（VWC）では、二〇〇九年上期からの重点デステイネーション地域の一つに「ドナウ流域国」（七カ国——オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、クロアチア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ）を指定しましたが、スロヴェニアは含まれていま

せん。日本人海外旅行者数の増加を日本・海外各国双方が望んでいる以上、誘致エリアの設定やその名称について双方の戦略を連携することで、より大きな効果を上げることができるとでしょう。

## 日本の観光地のイメージ

日本においても、個々の観光地はその「独自性」を認識し、他の観光地とのイメージの差別化を図ることが、観光客誘致の基本となります。その際、観光地に対する消費者のイメージ調査も参考になります。例えば、(財)日本交通公社の「旅行者動向2009」で大分県の別府温泉と由布院のイメージを比較すると、別府温泉よりも由布院の方が「自然や風景がすばらしい」「独特の雰囲気がある」と回答した比率が高くなっています。こうしたイメージの違いを誘客事業に活用していくのです。

また、近年は、国内でも広域エリアが一体となって観光事業を行っており、その一つが二〇〇八年度より観光庁が展開している「観光圏整備事業」（注2）によるものです。この事業は、観光立国の実現に向け、複数の自治体・観光地が連携して二泊三日以上の旅行を楽しめる国際競争力の高い魅力ある観光地域（観光圏）の形成を促進するための事業です。観光圏の名称に観光地名

（例：釧路湿原・阿寒・摩周観光圏、立山黒部アルペンルート広域観光圏）が盛り込まれている圏域もありますが、観光圏で指定されたエリアを消費者に定着させ来訪者を増やしていくために、どのようなエリア名称、あるいはエリア・イメージが使われるのか、今後の観光圏の工夫に期待しています。

（あさくら はるみ）

注1：JTB「ルックJTB」の二〇一〇年四月～十月パンフレット

注2：観光圏整備実施計画が認定されると、事業に対して観光庁から支援がある。二〇〇八～一〇年度の三年間で四十五地域が認定された。

表 観光地のイメージ比較（複数回答）

	別府温泉	由布院
自然や風景がすばらしい	○	●
いい温泉がある	◎	◎
おいしい食べ物がある	○	○
いい宿泊施設がある	○	○
独特の雰囲気がある	—	○

\* 回答者の選択率

◎：50%以上 ●：30%以上 ○：10%以上

（注）イメージの選択肢は16あるが、上記は2観光地に回答があった選択肢のみ。

資料：(財)日本交通公社「旅行者動向2009」



連載 I  
あの町この町  
第 38 回

# 南の恵み —— 和歌山県田辺市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀  
(イラストレーター)

和歌山県の田辺というと、女性はいいて梅干しを思い出すぞうだ。「南紀・田辺産」とくると梅干しの超ブランドで、ものによつては一粒がウン百円もする。

うかつにもそんなことは知らなかった。こちらは田辺即熊楠くまぐすであつて、南方熊楠が住み、粘菌、また民俗学にかかわるケタ外れた仕事をしたところ。

近年の熊野古道ブームから、紀伊の田辺が熊野への入口にあたり、山中の道中辺路なかへちと海沿いに大まわりする大辺路おおへちがここで分岐することもわりと知られてきた。

梅干しと熊楠と熊野古道。まるでべつべつのテーマでもあれば、何か共通するものがないでもないような気がする。そんなあやふやな気持でJR紀伊田辺駅に降り立った。昔のモダンな学校のような駅舎で、赤い屋根に白い壁、背後の緑としくりつけあつ

て、いかにも南方の眩しいような明るさ。すぐわきの観光センターを訪れると、中年の女性からにこやかに声をかけられた。

「クマグスですね」

やがてわかつたのだが、観光センターでも梅干しと熊楠と熊野古道が応待の三大テーマであつて、ひと目でほぼわかるという。いで立ちから古道組は一目瞭然だし、梅干しと熊楠では受ける感じがちがう。

「熊楠さんは勉強好きの人」

南方熊楠はもとより大勉強家だったが、おばさんのいうのは、熊楠を訪ねてくる人は勉強が好きなタイプが多いといった意味。何が根拠になったのか、おばさんはこともなく断言した。

「梅干しの人はいかにも梅干しなのよネ」

よくわからないが、経験が「いかにも梅干し」といった人の識別を教えたようだ。

梅干し組には紀州梅処や産直市場の入った地図。勉強好きは「南方邸&南方熊楠顕彰館近辺図」。

「せっかくだから両方ともどうぞ」

勉強に疲れたら梅干しを頬ばるといいわけだ。

駅前通りには梅干し専門店が店を並べている。たしかに粒よりで、一つ一つをとると、梅干しというよりも美しい果物を思わせる。古来、「梅干しばばあ」などとシワシワの代名詞に用いられてきたが、田辺梅干しは淡い桃色で、ふくよかな艶をもち、あやしげなイロツばさすら感じさせる。観光センターでもらつたマップの右はしがクーポンになつていて、提示すると「ちよっぴりプレゼント」(梅干し二粒入)がいただけるが、豊富なエロス梅干しをタダでもらうのははばかられた。



から東京だけでなく、イギリス、アメリカの学界に目ざましい成果を発表しつづけた。

地図を見ながら歩いているのに、方角がズレたぐあいだ。立ちどまって辻をたしかめているうちに、自分がどちらから来たのかわからなくなった。田辺は会津川がつくった三角洲にできた町であって、一方は熊野につづく山並み、他方は田辺湾。海側、山側とわかりやすいはずなのに、さて、どちらが海で、どちらが山なのか。町名標示は「上屋敷町」とある。南方旧宅は中屋敷町のはずで、気がつく通り過ぎていた。

紺の背広にネクタイを外して手にもった人によびとめられて、海はどちらだと問われた。

「たしか、こっちでは——」

自信なげに手で示すと、その人は反対側を指さし、こちらではないかという。あらためてクーボンつきマップをひろげ、双方の歩いてきた道筋を点検すると、その人のいうとおりで、しかも海はつい目と鼻の先、何やらキツネにつままれた気持である。

旧城下町田辺は安藤氏三万八千八百石。ただし、安藤家は紀伊徳川家の付家老の家柄であって、おおつびらに城はつくれない。会津川が田辺湾にそそぐ河口部に水門をつくり、水路で囲った藩邸を田辺城にかえた。

川沿いのへんなところを起点に町づくりをしたので、旧町は川から北東にひろがるかたちで道が整備され、屋敷割りがされた。これに対して明治以後は、JR駅のある北の一点をはじめりにして南へひろがる新町ができていった。両者が合わさるところは新旧を強引に結びつけ、道のないところを道路を通したものだから、駅から新町の感覚で旧町に入ってきて、だんだんと方角を失ったものと思われる。

上屋敷町、中屋敷町、下屋敷町は、川沿いの起点から上級、中級、下級の武士と分けたのだろう。いまでも「上」のところには、高い塀をめぐらした山林地主らしい豪邸がのこっている。「中」にくると、小振りの土塀や板塀になり、母屋に洋風の応接間をつけたした大正期ブルジョワ方式にかわってくる。

南方邸とあるが、中級武士の住居を書斎兼研究室、倉を資料室としたもので、在野の学者のつましい起き伏しが想像できる。商人であった弟や、後援者の援助で暮らしを立て、高価な本を買うとなると家族の食費も切りつめた。庭先の「貸家跡」がいたましい。身近な草木や苔を研究のエリアにしていたのに、わずかな収入を確保するため庭の一部を他人に譲り渡したかっこうだ。

隣り合ってガラスと木による超モダンな顕彰館ができている。それはいいのだが、展示品というとビデオと粘菌のコピー類と、古写真が少しあるだけ。二階の大半は資料室で入れない。若夫婦と老母の三人があっけにとられた顔でフロアに佇んでいた。

「これだけかいナー」

老母が小声で言った。それから「エライ先生やったのやネー」と、自分たちの訪問を確認するように呟いた。

おそらく熊楠と田辺市とは、あまり良好な関係ではなかったのだろう。南方熊楠記念館はさして縁のなかつた隣り町白浜町につくられ、遺品の大半はそこに収まっている。田辺市に顕彰会がつけられたのは、やつと近年のこと。

生前の熊楠は強烈な個性のもたらす奇行で知られた。浴衣に縄の紐をしめ、冷飯草履といった格好で採集から帰ってくる。儀礼ばつたことが嫌いで、故老たちの会所に入りびたり、銭湯で職人たちとおしゃべりするのが大好き。地元にとっては、エライ学者というよりも困った人であって、天皇の熊野行幸に際し進講したのはいいが、あろうことか粘菌見本をキャラメル空き箱に入れて献上した！

死後、遺品や資料の散佚をおそれ、遺族

や後援者が記念館の設置を市に仰いだとき、当局は色よい返事をしなかったのではあるまいか。白浜は温泉で聞こえ、世の情報に

通じている。いち早く記念館をつくり、観光コースに組み入れた。

南方熊楠はエコロジ運動の先駆者として全国にファンが多い。人の動きを見てとって田辺市は、あわてて顕彰会を立ち上げた。すでに何度も全集が出て、文庫版でもおなじみの人の「顕彰」というのも奇妙だが、もつとも顕彰を必要としたのは市当局だったかもしれないのだ。

「南方熊楠研究奨励事業」

熊楠先生の晴れ姿

フロアにポスターが掲げてあった。顕彰会と田辺市による若年研究者への助成事業だという。記念館がすでによそにつくられているのであれば、地元は知の記念を建てる。将来性のある若手を援助する。

採用件数 2件以内

助成期間 2カ年度

助成金額 2件の総計50万円以内

(これらを2年間分として一括交付する)

しばらく、まじまじとポスターを見つめていた。50を2で割ると25、25を2で割ると12.5、一年あたりの研究助成十二万五千円ナリ。あれこれ必要資料をととのえて応募したとしても、東京在の人は田辺への足代だけでほぼ消えてしまう。市当局が大まじめにこれだよしと考えたとしたら、研究者への侮辱になるのではなからうか。

紀伊田辺はきわめて恵まれた町である。川と山と海をもち、それぞれが川の幸、山の幸、海の幸を送ってくる。

「紀州田辺には季節ごとの旬の食材がいっぱいです」

観光情報が高らかにうたっているとおり、春のカツオとシラス漁を手はじめに、四季の食べ物とすぐ手近から届けられる。「味光路」と名づけられた駅前一角に飲食店がひしめいていて、その一つをのぞいたところ、壁三方に貼りめぐらされたメニューの多さに舌を巻いた。

「これ、全部でできますか?」

「ああ、できますヨ」

主人とおかみさん二人の店に、まだ日が暮れたばかりだというのに、こぼれんばかりの客がいた。

恵まれた条件は、きつと人を保守的にするのだろう。旧の習わしは律儀に守っても新しい試みは警戒する。身内には寛谷でも、よそ者には冷淡だ。

「味光路」のかたわらの蟻ありとおし通神社は、昔、異国人がやってきて、ねじくれたホラ貝に糸を通せと難題をふきかけたとき、当地の



樹木の棲み分け

「若い神さま」がまず貝にミツを流しこみ、それから糸をつけたアリを追いかみ異国人のハナをあかした、という故実にちなんでいる。

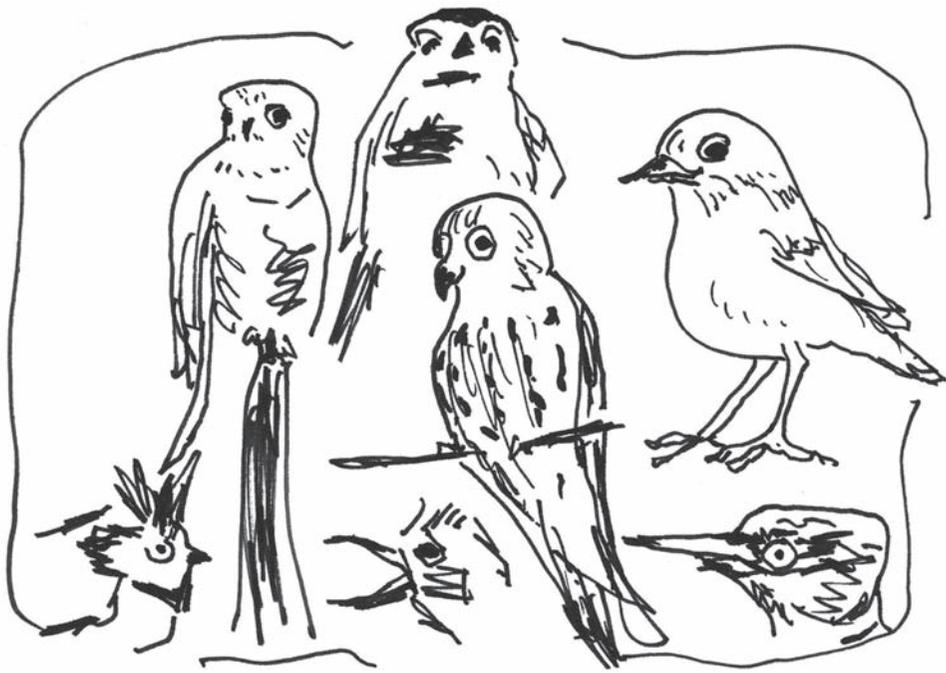
大通りをへだてた鬮とつけい雞神社は、もともと熊野の外宮格として祀られていたところ、源平の戦いに際し、どちらにつくかニワトリを闘わして占ったという伝説にちなんでいる。どちらも「蟻通の森」、「鬮雞の森」とよばれる豊かな神の杜もりをそなえていた。熊楠が採集と研究の拠点にしたところである。

「蟻通の森」はあとかたもない。鬮雞神社の本殿わきにくくつもの境内社が祀られているのは、かつて田辺のあちこちにあったものがここに合祀されたことを示している。明治政府が神社合祀令を楯にして「一町村一社を標準」に神社の管理と統合に乗り出したとき、南方熊楠は激しく反対した。合祀推進にやってきた官吏のもとに押しかけ、二週間あまりの勾留をくらったこともある。

激しく反対したのは、自分の研究対象が主に神社の杜などに棲息している微小な生物であったことにもよるが、抗議の意見書『南方二書』の述べているように、古来の神社を単位として人々の共同体がいとなまれ、土地に根ざした風習や伝統が維持されてきた。それが合祀の名のもとに一夜にして失われることを恐れたからだ。

それにもっともらしい理由はつけられているが、しょせんは打算づくの収奪であって、官憲にも神社側にも、合祀のあとの払い下げ、跡地利用の思惑が控えていた。熊楠はそのこともきちんと見抜いていた。

市の西かたの高台にある稲荷神社は、モツコリとした小山につつまれたぐあい、熊楠が訪れたころの姿をよくとどめている。深い社叢は八割方がコジイの古木で、それ



南紀の鳥たち

が雄大な林冠をつくり、そこにタブノキやユズリハの大木、タチバナ、サカキなどの亜高木、センリョウ、マシロウがまじっている。かつてと大きくちがうのは、森全体に乾燥がすすみ、湿った樹幹に生える着生植物が全滅したことだという。それこそ粘菌の故里であって、森の乾きが始まると、いち早くいなくなる。

すぐ下は一面の梅林だ。下にひろげたビニールに無数の梅が落ちていた。一つ一つもがなくても自然落下して、それがあの豊富な梅干しになる。

見はらしのいい一角から田辺市街がよく見えた。西南の方向に点々と稲荷神社、名刹高山寺、蟻通神社、

鬮雞神社がつづいて田辺湾の神島をめざしている。クラゲ状の形の小島で、熱帯、亜熱帯の植物の宝庫といわれている。

ここには観光資源があふれている。上・中・下の屋敷町には、熊野木材に手なれた大工による純日本家屋が点在していて、その少なからずが無人のけはいなのだ。なかにホレボレするような洋館があった。近所の人々が風通しに来ていた。

多くが取り壊しのせとぎわにある。知恵を出し保存と再利用を考えれば、またとない落ち着いたエリアが生まれる。点が線につながり、面にひろがる。おおかたの町が欲しくてたまらない良質の日本が、放置のままになっている。

翌日、町歩きに疲れて扇ヶ浜の砂べりで休んでいると、昨日、海はどちらと問われた人と出くわした。やはり手にネクタイをもっていて、ひと泳ぎしてきたという。所用で見知らぬ町になると、近くに海があれば泳ぐことにしており、日本という国は、年中、どこでも泳げるものだと言説した。

「田辺の人が羨ましいですネ」  
散歩に出て、ひと泳ぎして帰れる町はめったにない——かわった趣味の人だが、南の恵みの町の特性をよくとらえていた。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ  
風土燦々⑪

前代未聞の三河版サミット（後編）

—— 愛知県新城市

ルポライター 飯田 辰彦

十月中旬、新城の大橋弘太郎さんから、ヘボ（クロスズメバチ）サミットの開催日が十一月八日に決まった由の連絡が入った。正式名称を「海老ヘボサミット」といい、今回が十一回目で、地元「海老はち同好会」が主催する。四谷に住む弘太郎さんもちろん会員の一人で、同好会は海老・連谷地区に住む七十人ほどのメンバーで構成される。ただし、サミットには会員でなくても参加できるため二箱千円の登録料が必要、近隣の猛者も満を持して乗り込んでくる。当日は晴れ、絶好のイベント日和だった。会場は海老構造改善センター前の広場。朝八時半に現地にはせつけると、すでにコンテストは始まっていた。といっても、会場にはテントが三張り設置されているだけで、その一つが巣箱の解体場所、もう一つが大会本部で、残りが食べ物の出店に割り当てられている。何とものどかなサミットなのだ

ある。

この日集まった巣箱の数は八十個余り。一人で複数個持ち込むのが当たり前だそう。で、弘太郎さんも今回軽トラックで三箱運んできた。夏、百グラムにも満たなかった小さな巣が、四カ月ほどで巣箱からはみ出さんばかりに成長する。巣は巣箱の中で上から下へ向かって、笠を重ねたような格好でのびてゆく。前年は巣の一つが十二位に入ったという弘太郎さんは、今年は虎視眈々とその上を狙っている。

解体場所に充てられたテントでは、四人ほどのスタッフの手で次々と巣箱が分解され、中から巣房が何段にも層を成したヘボの巣が取り出される。驚くことに、スタッフは手袋をはめているだけで、あとは何の防具も着けていない。「煙幕（火花）」で眠らせてあるから大丈夫」と、まるで他人事のように笑い飛ばす。それよりも、巣箱の造

りが各人各様のため、一つひとつなるべく壊さないよう開けるのに苦労するという。

十一時を回ったころ、弘太郎さんが気を使って「ハチご飯」と、ヘボ入りの味噌だれを塗った五平餅を届けてくれた。ハチご飯は黒いヘボが生々しく散りばめられたまぜご飯で、実に香ばしくて、美味。片や五平餅のほうはヘボがすり潰されていて形は残っていないが、ハチご飯に負けず劣らずの一品に仕上がっている。この味を知らない外野席からは、「何でハチの巣ひとつのために命を落とすの？」といった嘲笑が聞こえてきそうだが、こうした声に対しては、「百聞は一食にしかず」と答えておくだけで十分であろう。

テントの解体班とは別に、テントを取り囲むように並べられた出番待ちの巣箱では、順番が近づくと煙幕班の手で一つひとつの巣箱に火花が仕向けられる。箱に開けられ



煙幕が立ち上る物々しいサミット会場。

たハチの出入り口の形状はさまざまで、スタッフたちは中のへボを眠らせるのに明らかに往生している様子だった。

「煙幕でへボが眠っている時間はせいぜい十分程度。効き方が悪いと、解体の時に勢いよくへボが巣箱から飛び出してきて、手当たり次第刺しまくるんです」

これは最初に弘太郎さんから言い含められた注意事項だったのだが、現実には起こった。煙幕担当の一人が花火の据えつけに手間取っているうちに、箱の中の働きバチが一斉に外に飛び出してきて、二人の

煙幕班に襲いかかったのだ。一人は一二カ所刺されただけで難を逃れたが、先輩格の年長者は不運にも逃げ遅れ、全身を刺されてしまった。途中で彼の姿が会場から消えたところをみると、病院に搬送されたのかもしれない。

ない。

解体班のスタッフの中からも、解体中に「あつ、刺された」という声が何度も聞こえてきたが、それはまるで蚊に刺されたともいえないような、冷静すぎる反応だった。慌てず、騒がず、そして痛がりもせず、といった態度なのである。やせ我慢はあるのだろうか、へボの本場の大会スタッフとして、みっともないマネはできなかつたということだろう。

後半に入って、次々に本命と目される巣箱が登場してきた。それらはほとんどが会員外のもので、作手や津具といった周辺地域に住

む愛好家が持ち込んだものだった。それまで一桁の上位につけていた弘太郎さんではあったが、これらの出番で次第に順位を下げざるを得なかつた。

「餌が違うのか、箱の造りに違いがあるのか……。こつちが二キロちょっとで、あつちには五キロ近くにもなるんだから、とても勝ち目はないですね。来年もまた、いろいろ工夫して少しでも順位を上げたいと思います」

と、弘太郎さん。案の定、上位入賞したのはすべて遠方からの参加者だった。表彰式では受賞者に対して、「もう来年は来なくていいからな」という冗談とも本音ともつかないヤジが飛んで、会場はドツと沸いた。不況のせいかな、本部席の脇に並べられたへボの巣の売れ行きも、あまり芳しくなかつたらしい。

しかし、弘太郎さんはもうとつとつに来年に向けて気持ちを切り換えている。「勝つても負けても、今宵の晩酌が一番の楽しみ」と、相手を崩す。サミットはともかく、弘太郎さんは小学生のころにはすでに覚えたとはいへボの飼育が、心の底から好きなのだ。大会が終わると、日一日と、三河の山の秋は深まってゆく。

(いいだ たつひこ)



連載Ⅲ  
ホスピタリティーの  
手触り59

# アメリカ人の魂が宿る場所

旅行作家 山口由美

\*\*\*\*\*  
アメリカの本質は  
\*\*\*\*\*  
広大な内陸部にあり

「アメリカ」と言われて、何を連想するだろうか。東海岸のニューヨークか、西海岸のロサンゼルスやサンフランシスコを思い浮かべる人が多いのではないだろうか。だが、大陸の東と西の沿岸部にあるアメリカは、むしろ特別なアメリカであって、アメリカという国の本質は、間に広がる広大な内陸部にある。

そのことを実感したのが、十年ほど前、建築家フランク・ロイド・ライトの取材で、大陸横断の旅をしたときであった。ライトは、生まれ故郷のウィスコンシン州と、後に縁のあったアリゾナ州に、自らの事務所であり住居であり、同時に学校でもあったタリアセンという共同体を運営していた。

共同体は、彼の死後も弟子たちによって引き継がれ、現在に至っている。

タリアセンには、不思議な習慣があった。春から夏にかけてはウィスコンシン、秋から冬にかけてはアリゾナで暮らすのである。そのため、毎年五月と十月に大規模な引越しをする。その昔は、西部開拓時代の幌馬車隊のように、キャラバンを組んで旅をしたという。今は各自旅をするが、しかし、旅には暗黙の規則があつて、大地をほうように車で大陸横断しなければならない。

その大陸横断の旅で、強烈に印象に残っていることが二つある。

一つは、アリゾナ州の北からユタ州にかけて、いわゆるグランドサークルと呼ばれるエリアの景観の美しさだった。

ウィスコンシンに集合する期日は決まっていたから、それほどんびりした旅でも

なく、立ち寄ったのは、モニュメントバレーとアーチーズだけだったが、アメリカという国そのものの印象を変えるほど感動した。

特にモニュメントバレーは、景観ばかりでなく、ナバホの居留地であつたことも印象深い。そこは国立公園ではなく、ナバホが管理する、彼らの「国」だった。

先日、グランドキャニオンを旅した私は、当時のことを思い出し、彼らの土地に帰ってきたことを実感していた。

古来、中西部に暮らした先住民、ナバホ、ホピ、アパッチなどは、グランドキャニオンの谷底を人類発祥の地と信じていた。標高差およそ千五百メートル。リムと呼ばれる断崖の縁からはるかに望む峡谷の底は、確かに別の世界をほうふつさせる。グランドキャニオンの谷底には、今も車道が通じていない。



エルトバホテルのダイニングルーム

そして、大陸横断の旅で印象に残った二つ目とは、ハイウェイを走る現代の幌馬車隊は、ファストフードを食べ続ける旅であったことだ。マクドナルド、ピザハット、デニーズなどなど、行けども行けども、連日、同じようなチェーンレストランしかない。

今回、グランドキャニオンの旅で発見したのは、このアメリカ的な外食の風景を生

み出した創始者の物語だった。

彼の名前はフレッド・ハーヴィー。一九世紀後半、中西部の鉄道駅にアメリカ初の子エーンレストランを展開した男である。

どこに行っても同じ味の、同じメニューが食べられる、アメリカン・ファストフードの発想は、今でこそネガティブにも語られるが、西部開拓時代の鉄道の旅においては、夢

の実現だった。当時、旅の途中、おなかをこわさない、まともな食事〴〵にありつける保障はどこにもなかったからである。ハーヴィーが提唱した「同質」と「清潔」は、やがてアメリカン・ホスピタリティーの要となる。

ハーヴィーのレストランには、そろいの白いエプロンの制服を着た「ハーヴィー・ガールズ」と呼ばれるウエートレスがいた。これがまた人気を博した。ハーヴィーは、若い女性に数少ない就職機会を与えると同時に、彼女たちが、やがて開拓者の妻となることで、フロンティアの礎ともなったのである。

グランドキャニオンの中心地、サウスリムの断崖に、そのフレッド・ハーヴィーが人生最後の夢と

したホテルが立つ。

鉄道駅のレストランや車内食堂で成功を収めた彼は、一九〇一年に鉄道が開業するグランドキャニオンに、自社のシンボルとなるようなホテルを計画した。ところが、鉄道開業のその年、ハーヴィーは、ホテルの開業を見ることなく亡くなってしまふ。

事業は息子に引き継がれた。こうして一九〇五年、開業したのがエルトバホテルである。

現在は国立公園が運営するこのホテル、日本ではあまり知名度がないが、実は、アメリカ有数の、予約の取れないホテルとして知られている。五月から九月のハイシーズンは、一年前から予約したほうがいい。

人気の理由は、国立公園内、グランドキャニオンを見下ろす最高の立地と、クラシックホテルの重厚な雰囲気だろうか。

先住民が人類の発祥地であると信じた土地の、フロンティアの誇りを継承する歴史。ここはアメリカ人の魂が宿る場所なのだ。

だからなのか、エルトバホテルのダイニングには、ゲストが醸し出す温かな雰囲気がある。大きなステーキの皿を前に、アメリカ人がアメリカ人であることの誇りにほお染め、お国自慢に花を咲かせていた。

(やまぐち ゆみ)

旅の図書館  
新着図書紹介

大都市圏へのヒト・モノ・カネの集中が進む一方で、日本の人口減少も本格化し始めたことにより、疲弊した地方の問題は「過疎化」から「限界集落」へと深刻の度合いを増してきている。定住人口の減少を交流人口で補い、地域の活性化を維持しようという自治体の取り組みは、各地で地域観光振興の動きを加速させ、旅行者の拡大のみならず、長期滞在や二地域居住、さらには、移住までも視野に入れる時代を迎えた。

『ちょっと田舎で暮してみたら／実践的国内ロングステイのすすめ』（能勢健生著、新潮新書）では、時代の要請を先取りするような著者の体験が丁寧に紹介されている。

五十七歳という若さでサラリーマン生活を切り上げた著者は、「私の国内ロングステイの『目的』は、我が夫婦の国内ロングステイ自体を『実験』と捉えていることにある」と記し、「定年退職した夫婦がどのような生活時間を共有しながら国内ロングステイを過ごすかということ、身をもって体験することである」と言い切る。

著者は二〇〇四年に長年勤めた会社を辞めた後、沖縄県伊是名島、岡山県新庄村、東京都小笠原父島、山形県大蔵村肘折温泉、長崎県小値賀島の全国五カ所、それぞれ一カ月に及び長期滞在を体験した。

「その結果報告をつぎに控えている定年夫婦（団塊世代）に伝えてみたいと考えたのである」という著者による、実践的国内ロングステイの試みは、団塊世代の背中を追いつく「老後」という言葉の現実味に日々思いを致し始めている筆者の世代にも、多くの示唆を与えてくれる。

「残された人生時間でどれだけ新しい局面を見いだしていけるかが、人生の豊かさや幅に比例するように思える」と考える著者は、一カ月にわたって自宅を離れる国内ロングステイを検討するにあたり、課題の一つに「同伴する配偶者の同意をとるにつける」ことを挙げています。

結果的に、年老いた親を抱える家庭の事情などから、配偶者の同伴が百パーセントかなくなったケースはないのだが、著者は伴侶を連れ出すことが「夫の役割」だと確信する。

長期滞在から二地域居住・移住へとステップを進めることは、人口減少問題を抱える自治体にとっての理想型かもしれないが、著者が指摘するように、移住は「人生において大いなる決断」である。現在の生活とまったく決別することになれば、失うものや手に入れるものとの差し引きを考えてしまう。「人生のつまらぬ損得勘定をしていくようでは無理な話」という自虐的な述懐は、著者だけのものではないはずだ。

公営の長期滞在施設や空き家、湯治宿などを利用した一カ月に及び滞在は、その土地の人々との温かい交流や田舎ならではの濃密な近所付き合いなど、一過性の旅では決して味わえない貴重な体験と感慨を著者夫婦に残してくれた。

「妻が温泉から上がってきた時の満足そうな顔を見るのもうれしかった」と山形で滞在了湯治宿を振り返る著者は、「六十代を迎えた夫婦には六十代なりのゆったりとした旅の仕方があり、六十歳に到達しているからこそ感じる穏やかな感受性もある」と記す。

滞在了各地での一カ月間の費用も詳細に紹介されており、まさに、国内ロングステイの指南書とも言える内容だ。

「素のままの土地に滞在したい」と願う著者の思いに込められる環境を整えていけば、「ちょっと田舎で暮してみたい」と考える夫婦も増えていくに違いない。（挑生）



新書判 190 ページ  
定価 680 円  
新潮新書

■「コミュニティ・ベースド・ツーリズム研究」  
世界の実践事例に学ぶ成功の鍵

コミュニティが主体的に観光振興を行っていくあり方として、海外ではすでに知られてきている「コミュニティ・ベースド・ツーリズム」に注目し、北海道大学観光学高等研究センターとの共同研究として三年間にわたり、中国貴州省ブータン王国、ニュージーランドの三カ国でフィールドスタディーを行った研究報告書。二〇一〇年三月発行。



■旅行者動向別冊  
旅行者の行動と意識の変化 1999～2008

旅行者の動きを全国規模の独自アンケートからまとめ毎年発行している『旅行者動向』をもとに、十年間の変化を改めて分析・整理したもの。十年間を通して見ることで、旅行マーケットの中長期的なトレンドが浮き彫りに。二〇一〇年三月発行。



■「京都一人勝ち」から学ぶ、創造性が魅せる観光の時代

当財団主催「旅行動向シンポジウム」採録集。全国的に伸び悩む旅行市場のなかで、二〇〇〇年以降、年々観光客数を伸ばし続け、〇一年に掲げた「二〇一〇年までに五〇〇万人」という目標を二年も早く達成した京都。シンポジウムでは、「なぜ京都だけが一人勝ち!?」集まる秘密を解く」と題し、京都の集客魅力について分析、議論を展開。四つの仮説を挙げて、人気の背景と仕掛けを探り、他の観光地、観光産業の活性化に役立つ普遍的な要因の発見を試みた。



本書は、シンポジウム当日の採録だけにとどまらず、企画過程やシンポジウム開催後の研究成果を「研究論文」「研究ノート」として掲載している。

二〇一〇年六月発行。  
※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。  
担当：財団法人日本交通公社観光文化事業部

電話 03・5208・4704 <http://www.jtbr.or.jp>

次号予告

●国の重点施策として、観光振興、とりわけアジアからの訪日外国人旅行に期待が寄せられています。次号は、「九州観光交流新時代―花開くアジアの玄関」と題して、九州における観光の位置づけやインバウンド振興への取り組みなどを紹介します。

調査研究だより

●近年、「当地域は、九〇%の人たちから満足いただきました」  
「当施設は、全国CSランキングで上位となりました」  
といった発表が、地域や観光事業者などからなされるのが少なくない。

●私は、こうした発表を見ると「困ったなあ」と感じてしまう。なぜなら、顧客満足度 (Customer Satisfaction) はとても重要な事項ではあるが、CSという概念に対する誤解と誤用によって、その本質とは異なる運用がされてしまっているためだ。

●例えば、「九〇%の人たちから満足いただく」ことは、実は、ごく当たり前のことであるし、CSランキングは、提供サービスの品質水準を示してもいい。つまり、前述のような発表内容は、実は、ほとんど意味を持っていないのである。

●こうした現状に対し、当財団では昨年度、観光庁からの受託で「観光地の魅力向上に向けた評価手法調査」として、全国五十地域を対象とした横断的なCS調査を実施した。本調査では、私が昨年度、海外にて習得した先端的なCS研究モデルを導入し、科学的な分析を行い、今日的なCS調査の手法、結果の見方の整理を行っている。今後の着実な観光地づくりの参考になれば幸いである。(山田)

編集後記

◆全国津々浦々。島国日本の地形を言い表すのにこれほどの確かな言葉はないかと思えます。この地形を活用して近世には船運が物流の主体となり、多くの港町が発達しました。そこは人と物の交流の拠点として文化も行き交い大いなる賑わいを見せました。しかるに、近年急激に進んだ道路網の整備とともに物流が陸運中心となり、港が船舶の大型化に対応して物流機能本位の近代港湾に変貌していく港と漁村化していく港となるにつけ、人々の賑わいから遠ざかる存在となった時代が過ぎました。こうした流れに歯止めをかけ地域経済の振興を図るため、港に賑わいを取り戻す運動が全国に広がっています。生活者の視点から港を見直し、まちと港の一体化による港町再生がそのキーワードです。港を人々の交流の舞台とすべく住民参加型の「みなとまちづくり」が始まっています。海と陸が交わる港の景色は本来最高の観光資源です。港がオアシスとなり賑わい再生を実現するために、美しい景観を形成することから始めなければなりません。清水港はその先進事例となりました。

◆観光振興の手立てとして正確な観光統計の必要性が叫ばれています。観光庁では観光統計の整備を図るとともに、そのデータを活用した実証分析に関する論文募集を実施しています。今回、その概要につきご紹介いただきます。

(宇八)



## 観光文化 第202号

第34巻4号通巻第202号

発行日 2010年7月20日



発行所：財団法人 日本交通公社  
東京都千代田区丸の内 1-8-2  
第一鉄鋼ビル  
〒100-0005 ☎ 03-5208-4701  
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2  
第二鉄鋼ビル 旅の図書館内  
〒100-0005 ☎ 03-3214-6051  
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：外川宇八  
発行人：新倉武一



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554